

え ひ め 愛比売

平成15年度 年報

2004

財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター

序 文

財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センターは、昭和52年の設立以来愛媛県内における埋蔵文化財に関する調査研究及び埋蔵文化財の保護思想の涵養と普及に取り組んでまいりました。このたび平成15年度に、当センターが実施した事業概要を取りまとめた平成15年度年報「愛比売」を刊行することとなりました。

この第6集においては、縄文時代から中世にかけての多量の遺構や遺物が出土した「猿川遺跡」をはじめとした21件の発掘調査事業、弥生時代終末期から古墳時代前期の集落を検出した「善応寺畦地・大相院・別府遺跡」などの整理・報告書作成事業ならびに発掘調査に伴う現地説明会などの普及事業の概要をまとめております。

本書が地域における歴史や考古学研究の資料としてご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、各事業の実施にあたり、ご指導、ご協力いただきました関係諸機関ならびに関係者のみなさまに厚くお礼を申し上げます。

平成16年11月

財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター
理事長 野本 俊二

目 次

I 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センターの概要	1
1 設立趣意書	1
2 沿革	1
3 事務所所在地	1
4 役員名簿	2
5 平成15(2003)年度組織及び職員	2
6 年度事業一覧	3
1.委託事業(寄附行為第4条第1号)	3
2.普及・啓発事業(寄附行為第4条第2号)	3
3.道後公園(湯築城跡)関係事業(寄附行為第4条第4号)	4
II 事業報告	5
1 事業の概要報告	6
2 発掘調査を実施した遺跡の概要	9
1.上分西遺跡	11
2.松原遺跡	13
3.松ノ丁遺跡	14
4.大開遺跡	15
5.扇田遺跡2次調査	17
6.本郷I遺跡	18
7.松木池遺跡	19
8.世田山IV号墳	20
9.郷桜井堀遺跡	22
10.高地栗谷4号墳	23
11.阿方頭王XII遺跡	24
12.阿方頭王XI遺跡	25
13.阿方頭王IX遺跡	26
14.阿方頭王VII遺跡	27
15.別名寺谷II遺跡	28
16.高橋佐夜ノ谷遺跡	29
17.矢田長尾I遺跡	30
18.矢田長尾I号墳	31
19.猿川遺跡	32
20.道後町遺跡	33
21.熱田城跡	34
3 刊行した報告書の概要	35
4 道後公園(湯築城資料館)	37
1.事業の概要報告	37
2.湯築城資料館利用状況	37
3.国史跡湯築城跡普及啓発事業の概要	37

例 言

- 1 本年報は、財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センターが平成15(2003)年度に実施した業務の記録である。
- 2 概要の記載は発掘調査を実施した遺跡単位とし、東予・中予・南予の順に掲載した。
- 3 遺跡位置図は国土地理院発行25,000分の1地形図を使用した。
- 4 各遺跡の調査期間は現場作業開始から終了までとした。
- 5 各事業・各遺跡の概要の執筆者名は文末に記している。
- 6 概要中の図の略号は次の通りである。
SA：柵列 SB：掘立柱建物跡 SD：溝 SE：井戸 SI：竪穴住居跡 SK：土坑
SP：柱穴・小穴・ピット SR：自然流路 ST：土坑(墳)墓 SU：集石遺構 SX：性格不明遺構
SM：古墳
- 7 本年報の編集は西川真美・柴田昌兎が行った。

I 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センターの概要

1 設立趣意書

文化遺産は、県民が長い歴史の中においてはぐくみ育ててきた貴重な財産であり、この貴重な財産を将来にわたって長く保存し、後世に伝えることは、歴史と風土に根ざした豊かな社会を維持発展させるうえにきわめて重要である。

特に、埋蔵文化財の保護は、我が県の土地開発の発展の中で、今日ますます大きな問題になっている。

当法人は、埋蔵文化財の調査研究を行うとともに埋蔵文化財の保護思想の涵養と普及を図り、地域文化の振興に寄与することを目的として設立するものである。

2 沿革

昭和52(1977)年 5月24日	発起人会議開催される。
5月31日	愛媛県教育委員会へ設立許可申請書を提出する。
6月9日	愛媛県教育委員会から設立許可される。 事務局を松山市堀ノ内官有地(愛媛県立歴史民俗資料館内)に置く。
6月20日	松山地方法務局へ設立登記申請する。
8月8日	第1回理事会を開催する。
12月8日	第1回評議員会を開催する。
昭和53(1978)年 1月1日	調査員2名を採用する。
4月1日	伊予郡砥部町へ整理事務所を借地により開設する。
昭和55(1980)年 4月1日	県から教員が調査員として派遣される。
7月18日	事務局を愛媛県庁第二別館へ移転する。
昭和57(1982)年 8月1日	徽章を制定する。
平成元(1989)年 4月1日	県から担当主任が派遣される。
平成2(1990)年 4月1日	事務局を県庁第一別館へ移転する。
平成3(1991)年 4月1日	温泉郡重信町へ整理事務所を移転する。
平成8(1996)年 3月11日	衣山整理事務所を開設する。
平成9(1997)年 4月1日	組織改正により2課3係を新設し、総務課長、調査課長、調査第一係長、調査第二係長、調査第三係長を置き、県から派遣2名が増員される。
平成12(2000)年 4月1日	衣山整理事務所を閉鎖し、重信整理事務所に統合する。事務局を県庁第二別館に移転する。
平成14(2002)年 4月1日	道後公園(湯築城跡)の管理運営を県から委託される。組織改正により総務課企画普及係を設置、事務局を県庁第一別館に移転する。
平成15(2003)年 4月1日	事務局を愛媛県三番町ビルに移転する。

3 事務所所在地

本部	愛媛県松山市三番町4丁目10番地1
重信整理事務所	愛媛県東温市田窪字井口36番8号

4 役員名簿

平成15(2003)年度

役員	理事長	野本俊二	県教育委員会教育長
	常務理事	天野全二	(財)県埋蔵文化財調査センター参事
	理事	仙波令巳	県文化財保護審議会委員
		森 光晴	県文化財保護審議会委員
塩出皓治		県町村会会長	
員	西山修一	県教育委員会事務局文化スポーツ部長	
	監事	一色 光	県教育委員会事務局指導部長
評議員		中矢陽三	松山市教育委員会教育長
		赤松 環	県生涯学習センター嘱託研究員
		岡 省吾	県町村教育長会長
		田所清二	県町村会事務局長
		保木俊司	県教育委員会事務局教育総務課長
	池川孝文	県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課長	

5 平成15(2003)年度組織及び職員

	参事(兼常務理事)	天野全二	
総務課	総務課長	真山 勉	
	専門員	松本 博	
	主 事	相原正明	
	臨時補助員	河野有美 中田瑞穂 児玉典子 森加代子 村井奈津代	
湯築資料館	館長	藤原正継	
	企画普及係長	武智勝利	
	学芸員	松村さを里	
	嘱託員	柴田圭子	
	臨時補助員	松尾あき子	
調査課	調査課長	沖野新一	
	調査第一係	調査第一係長	岡田敏彦
	主任調査員	眞鍋昭文 柴田昌児	
	調査員	土井光一郎 三好裕之 日和佐宣正 立花 卓 小野振一郎	
		中野 亮 高田明知 児島祥之	
	嘱託員	今泉ゆかり 平岡孝司 若杉美香 岡美奈子	
調査第二係	臨時調査員	中野邦子	
	調査第二係長	中野良一	
	主任調査員	多田 仁	
	調査員	山内英樹 池尻伸吾 吉野加枝美 小笠原啓二 中島弘二	
		越智憲悟 楨光一郎	
	嘱託員	北山育美 兵藤千晶 藤本清志	
調査第三係	臨時調査員	阪井 淳 高見徳子 大庭美鈴 松本佳子 木原貴子	
	調査第三係長	高橋勸次	
	主任調査員	西川真美	
	調査員	稲葉靖司 三好一史	
	嘱託員	寺嶋信三 楠真依子 鎌土奈々	
	臨時調査員	片上和美 菅野裕子	

6 年度事業一覧

1. 委託事業（寄附行為第4条第1号）

平成15(2003)年度埋蔵文化財調査事業

委 託 者	事 業 名 称	面積 (㎡)		金額 (円)	備 考
		発掘	整理		
国 土 交 通 省	松 山 管 内	10,900	9,183	172,725,000	
	大 洲 管 内	2,500		47,355,000	
		(22,300)			(試掘調査対象面積)
地 域 振 興 整 備 公 団	今 治 新 都 市	14,330		135,576,000	繰り越し
愛 媛 県	湯 山 高 縄 北 条 線 外	8,785	33,969	304,706,000	
合 計		58,815	43,152	660,362,000	発掘調査面積は試掘面積を含む

平成15(2003)年度埋蔵文化財調査(発掘調査)一覧

No.	遺 跡 名	所 在 地	調 査 原 因	調 査 係	所 属 時 期
1	上分西遺跡	四国中央市上分町	国道11号川之江三島バイパス建設	調査第一係	縄文時代～中世
2	松原遺跡	新居浜市寿町	国道11号新居浜バイパス建設	調査第一係	弥生時代
3	松ノ丁遺跡	周桑郡小松町北川松ノ丁	国道11号小松バイパス建設	調査第一係	弥生時代～古代
4	大開遺跡	周桑郡小松町北川大開	国道11号小松バイパス建設	調査第一係	弥生時代～古代
5	扇田遺跡2次調査	周桑郡丹原町願連寺	県道壬生川丹原線整備	調査第二係	弥生時代
6	本郷I遺跡	東予市周布	県道壬生川丹原線整備	調査第二係	古墳時代
7	松木池遺跡	東予市実報寺	県道孫兵衛作壬生川線整備	調査第二係	縄文時代～弥生時代
8	世田山IV号墳	東予市六軒家	県道孫兵衛作壬生川線整備	調査第二係	古墳時代
9	郷桜井堀遺跡	今治市郷桜井	県道桜井山路線改良工事	調査第三係	中世
10	高地栗谷4号墳	今治市高地	地域振興整備公団今治新都市開発	調査第二係	古墳時代
11	阿方頭王XII遺跡	今治市阿方	地域振興整備公団今治新都市開発	調査第二係	弥生時代～古代
12	阿方頭王XI遺跡	今治市阿方	地域振興整備公団今治新都市開発	調査第二係	弥生時代
13	阿方頭王IX遺跡	今治市阿方	地域振興整備公団今治新都市開発	調査第二係	弥生時代
14	阿方頭王VII遺跡	今治市阿方	地域振興整備公団今治新都市開発	調査第二係	弥生時代
15	別名寺谷II遺跡	今治市別名	地域振興整備公団今治新都市開発	調査第二係	古代
16	高橋佐夜ノ谷遺跡	今治市高橋	地域振興整備公団今治新都市開発	調査第二係	弥生時代～古墳時代
17	矢田長尾I遺跡	今治市矢田	地域振興整備公団今治新都市開発	調査第二係	弥生時代～古墳時代
18	矢田長尾I号墳	今治市矢田	地域振興整備公団今治新都市開発	調査第二係	古墳時代
19	猿川遺跡	北条市猿川	県道北条玉川線建設	調査第一係	縄文時代～中世
20	道後町遺跡	松山市道後町	県道東一万道後線拡張	調査第三係	縄文時代～中世
21	熱田城跡	北宇和郡津島町	一般国道56号宇和島道路建設	調査第一係	中世

2. 普及・啓発事業（寄附行為第4条第2号）

特別展

愛媛県立歴史民俗資料館と共催し、次の事業を同資料館で実施した。

「第1回考古資料特別展 愛媛県埋蔵文化財調査センター 発掘調査速報展」

〔平成15年10月11日～12月7日〕

「第2回考古資料特別展 道後祝谷遺跡群出土資料展」〔平成16年1月24日～3月14日〕

現地説明会

発掘調査を実施した遺跡で遺構・遺物などを一般に公開する現地説明会を平成15年度は下記の2遺跡で開催した。

遺 跡 名	実 施 日	場 所	参加人数
松 原 遺 跡	平成15年8月23日	新居浜市寿町	210名
上 分 西 遺 跡	平成16年1月31日	川之江市上分町	350名

「発掘体験」学習の受け入れ

主催団体・実施日・場所

小松町立小松中学校

平成15年12月17日

周桑郡小松町 『大開遺跡』

3.道後公園(湯築城跡)関係事業 (寄附行為第4条第4号)

委託者	事業(業務)名称	金額(円)	備考
愛媛県(土木部)	道後公園管理業務	53,293,800	
愛媛県(教育委員会)	国史跡湯築城普及啓発事業	2,629,200	
合計		55,923,300	



親子で学べる湯築城講座



湯築城跡シンポジウム

II 事業報告

1 事業の概要報告

調査第一係事業概要

調査第一係の平成15年度事業は、前年度からの継続事業となる国土交通省事業の「松山管内埋蔵文化財調査」「大洲管内埋蔵文化財調査」と平成14年度から繰り越した愛媛県事業の「湯山高縄北条線埋蔵文化財調査」「北条玉川線埋蔵文化財調査」の4件、平成15年度契約の「北条玉川線(81-1)埋蔵文化財調査」の1件を併せた5件であった。なお「北条玉川線(81-4)埋蔵文化財調査」の1件は平成16年度に繰り越している。

松山管内埋蔵文化財調査は国土交通省松山河川国道事務所の川之江三島バイパス・新居浜バイパス・小松バイパス・今治小松道路・松山インター関連・砥部道路の6路線において発掘調査・整理作業・試掘調査を実施したものである。大洲管内埋蔵文化財調査は大洲河川国道事務所の内子五十崎改良と宇和島道路の2路線において試掘調査・発掘調査を実施したものである。

[発掘調査]

発掘調査を実施したのは川之江三島バイパスの上分西遺跡6・7区、新居浜バイパスの松原遺跡、小松バイパスの松ノ丁遺跡と大開遺跡1・2区、宇和島道路の熱田城跡、北条玉川線の猿川遺跡である。なお新居浜バイパスの仮称立石遺跡は、新居浜市教育委員会との協議の結果、松原遺跡と遺跡名を変更する。

上分西遺跡では6・7区ともに中世の遺構面2面を調査し、6区上面で3棟の掘立柱建物、下面で土坑・柱穴を調査した。7区上面では1棟の掘立柱建物や土坑・柱穴、下面では土坑とともに自然流路を検出した。6・7区で検出した掘立柱建物は昨年度調査の3・4区で多数検出した掘立柱建物の桁方位と同じものである。7区下面では一部弥生時代の遺構も検出している。松原遺跡では弥生時代中期の竪穴住居3棟を調査、円形2棟・長方形1棟で長方形の竪穴住居からは香川県出土の土器に類似した多量の弥生土器が出土した。松ノ丁遺跡では7世紀後半から9世紀末ごろの竪穴住居・掘立柱建物、大開遺跡からは8世紀から11世紀初頭の掘立柱建物や柵列・条里地割の坪界溝などを検出した。大開遺跡の掘立柱建物はコ字状配置の官衙風建物である。松ノ丁・大開両遺跡の近くには7世紀後半創建の国史跡法安寺跡があり、今後の遺構・遺物の分析により居住集団の性格も含め法安寺との関連が注目できる。熱田城跡は単郭の中世城館で見張り台・掘立柱建物を検出し、出土遺物から14世紀後半から15世紀前半の時期をあてている。猿川遺跡は2面の遺構面からなり、上層は中世、下層は縄文時代後・晩期である。縄文時代の遺物としてサヌカイト・黒曜石の剥片や粗割素材が出土している。

なお、川之江三島バイパスの上分西遺跡及び新居浜バイパスの松原遺跡では一般県民向けの現地説明会を開催している。

[試掘調査]

試掘調査は、川之江三島バイパス・新居浜バイパス・砥部道路・内子五十崎改良・宇和島道路で実施し、川之江三島バイパスでは伊予三島市側で中世の遺構・遺物の広がりを確認している。新居浜バイパスでは弥生時代中期の遺構の広がりを確認しているが、周辺に未試掘調査範囲があるため、遺跡の広がりについてはすべての試掘調査完了時に検討することとなった。砥部道路では現道拡幅予定地の一部で中世の遺構・遺物を確認している。宇和島道路では、津島町において試掘調査を実施し、熱田城の範囲確定を行っている。

[整理作業]

松山インター関連では平成10年度から実施していた北井門遺跡の実測作業ではほぼ1万点の土器実測を終了した。小松バイパスの大久保遺跡、今治小松道路の久枝・久枝Ⅱ・本郷遺跡では報告書作成に向け、遺構・遺物のトレース作業や原稿執筆を実施した。

報告書作成では新居浜バイパスの「星原市東遺跡・星原市遺跡」を一般国道11号新居浜バイパス建設に伴う埋蔵文化財調査報告書第1集として刊行、県道湯山高縄北条線は多量の遺物整理を終え、「善心寺畦地遺跡・大相院遺跡・別府遺跡」を一般県道湯山高縄北条線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書として刊行した。(調査第一係長 岡田敏彦)

調査第二係事業概要

調査第二係担当事業は、愛媛県の委託を受けた3件・4遺跡と地域振興整備公団の委託を受けた12遺跡で発掘調査と、愛媛県の委託を受けた試掘調査1件を実施した。整理作業は愛媛県の委託を受けた2件・7遺跡について実施した。

[発掘調査]

県の委託を受けた調査は、ここ数年、東予市および隣接する丹原町に集中している。東予市の県道孫兵衛作壬生川線の新設路線では、横穴式石室を有する円墳が調査され、比高の低い丘陵の中央部を削平して石室を構築し、尾根ラインに直交する周溝を掘削し円墳を表出している。近隣に集中する後期古墳の様相が明らかとなった。また同路線では県下縄文時代後期の標式遺跡である六軒家遺跡の近くが調査され、溝から同時期の土器が出土している。

東予市と丹原町の県道拡幅による調査では、古墳時代後期の溝が検出され、杭や整形痕跡のある板材などが出土している。また弥生時代中期の遺存の良い土器も出土しており、過年度の調査成果と合わせてみると遺跡の広がりがかなり明確になってきた。

今治市で実施されている大規模開発に伴う調査のうち、阿方地区では丘陵の斜面部に弥生時代中期後半の段状遺構が検出される遺跡が集中している。この段状遺構は平坦面が被熱し赤変したものが多く、また炭のつまったピットが検出されることや、周囲から鉄滓が出土するなど鍛冶に関連する遺構の可能性も考えられる。

高地地区では二基並列した土坑墓を埋葬主体とする、5世紀前後に造られた円墳の調査を行った。副葬品として鉄鏃の束や鉄鉾などが残存していた。

高橋地区では弥生時代中期の丘陵性遺跡や、尾根上および斜面部に構築された古墳の調査において新たな成果を収めた。弥生時代の遺跡では、丘陵の稜線部に竪穴住居を、斜面部には阿方地区と同様に段状遺構を検出した。阿方地区では稜線上には遺構がなく斜面部に集中しており、両地区で検出される遺構の種類は同じであるが、遺構が作られている位置関係に差が認められる。

古墳では丘陵の尾根頂部に造られた後期古墳を調査し、石室の攪乱は著しいが馬具片なども出土している。一方、斜面部の背に周溝を巡らせた終末期古墳も検出された。天井部までの持ち送りがきつい特徴を有する古墳であった。後期から終末期にいたる古墳の変遷が追える、格好の資料を得ることができた。

[試掘調査]

県の委託を受けて、宇和町の高速道路予定地で試掘調査を実施したが遺構・遺物は検出されなかった。

[整理作業]

宮前川の河川改修による調査を行った「南斎院土居北遺跡」と「南江戸鬮目遺跡」の報告書を刊行した。いずれも中世の遺跡であり、土居北遺跡は16世紀の方形館を中心とし、鬮目遺跡では12世紀から14世紀にかけての集落変遷が追えることや、豊富な出土遺物などが大きな成果であった。報告書の考察編において両遺跡で検出された数千本にもおよぶピットの組み合わせを検討し、図面上で掘立柱建物の復元を試みる一方また遺物を出土する柱穴について集成を試みた。さらに土師器皿などの底部に見られる特徴的な痕跡について、製作実験を行い分析した。最後に上記分析結果などを加味して、南江戸地区の集落の一形態について考察した。

東予市で調査された県道東予玉川線の整理作業を実施した。延長2kmの中に5遺跡が存在し、縄文時代早期から中世まで多くの遺構・遺物が検出されている。2年の整理計画で、今年度は遺構原図の作成と遺物実測の一部を実施した。

(調査第二係長 中野良一)

調査第三係事業概要

平成15年度の調査第三係の担当事業は、愛媛県からの委託事業が5件であった。

[発掘調査]

今治地区では県道桜井山路線改良工事に伴う調査(郷桜井堀遺跡)を実施した。「郷桜井堀遺跡」では中世の土坑、柱穴(小穴)、自然流路を検出している。出土遺物や遺構相互の重複関係から判断して、13世紀初頭に自然流路が埋没した後、集落が営まれたものと考えられる。しかし、本遺跡の西には、鎌倉時代を盛行期とし、室町時代に廃絶した集落である郷桜井八反地遺跡が隣接していて、本遺跡との関連性もあり、今後の整理作業に期待したい。

松山地区では県道八倉松前線道路改築事業に伴う調査(伊予神社Ⅱ遺跡)・県道六軒家石手線道路改良工事に伴う調査(道後鷲谷遺跡2次)・県道東一万道後線整備に伴う調査(道後町遺跡)を実施した。「道後町遺跡」は平成11年度から断続的に調査を実施し、平成15年度で現地調査を完了した。「伊予神社Ⅱ遺跡」では掘立柱建物や土坑、溝、井戸、柱穴等を検出し、報告書にまとめた。「道後鷲谷遺跡2次」では土坑、溝、柱穴等を検出し、報告書にまとめた。

[整理作業]

県道東一万道後線では発掘調査と並行して遺物の洗浄・注記を行い、現地調査完了後は実測・復元・写真撮影等の整理作業を行った。

『伊予神社Ⅱ遺跡—一般県道八倉松前線道路改築事業に伴う埋蔵文化財調査報告書—』、『道後鷲谷遺跡2次—一般県道六軒家石手線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書—』、『矢田八反坪遺跡3次—浅川中小河川改修事業に伴う埋蔵文化財調査報告書—』の報告書を刊行した。「伊予神社Ⅱ遺跡」では重信川の流路の変遷を、また、「道後鷲谷遺跡2次」では遺跡の集落の変遷を、さらに「矢田八反坪遺跡3次」では植物珪酸分析や花粉分析などの自然化学分析を行い、矢田地域の古植生や古環境を明らかにするなどの成果をあげることができた。

(調査第三係長 高橋勸次)

普及啓発事業概要

職員の埋蔵文化財に関する研究成果をまとめた『紀要愛媛』は、号を重ね4号を刊行した。『紀要愛媛』は年報『愛比売』とともに当センターの活動を、県民の方々に知っていただくためだけでなく、職員自身の研鑽、愛媛県における考古学研究の基礎資料提供として広く活用されることを期待している。

現地説明会は川之江市・新居浜市で開催し、多くの方々に発掘調査現場の状況を見学してもらった。現地説明会資料や当日の見学状況はホームページで公開している。

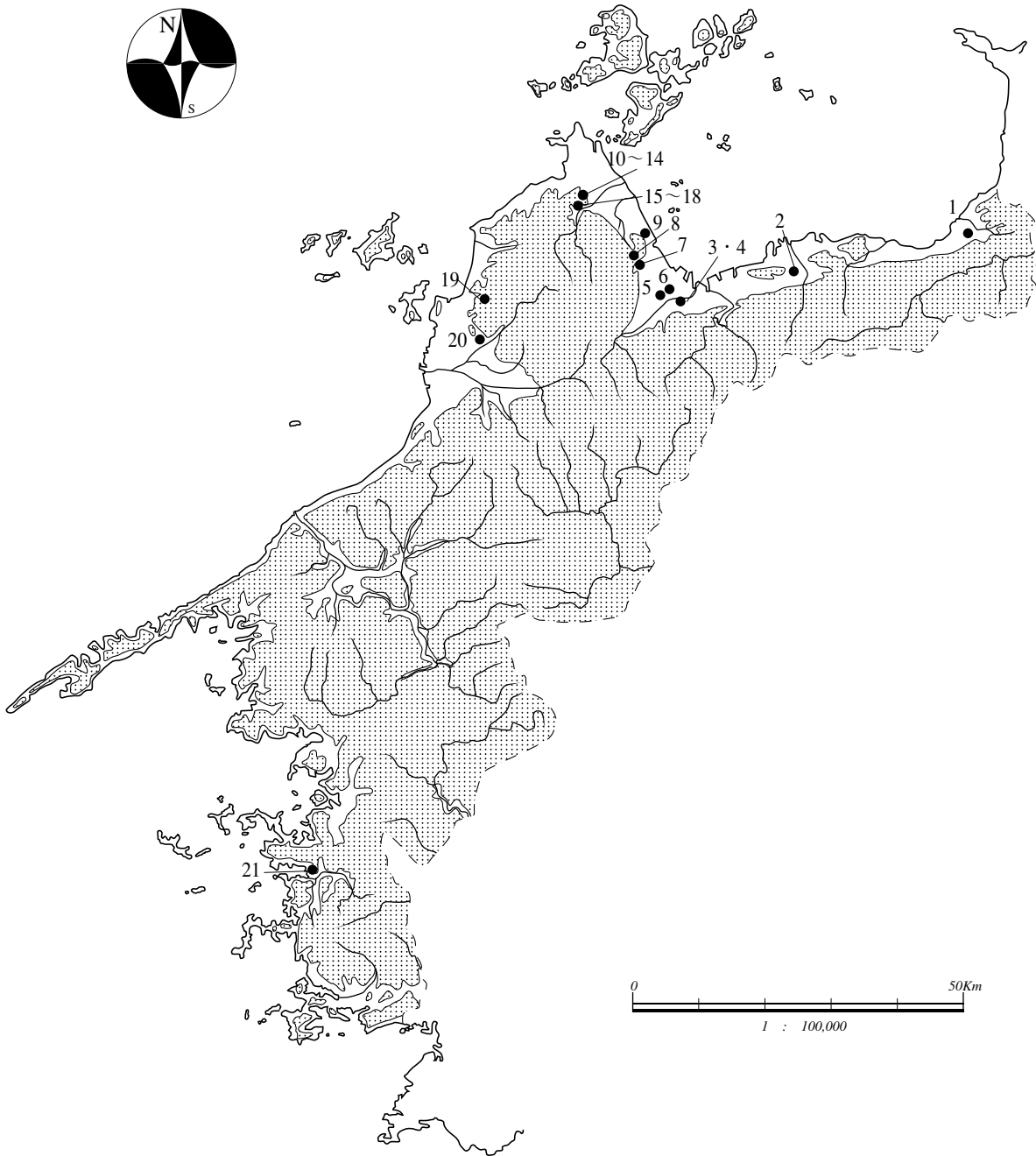
さまざまな事業を行なう中で昭和59年から刊行してきた『まいぶんえひめ』はホームページ上にその機能を移す方針で検討に入った。

愛媛県立歴史民俗資料館と共催の考古資料展では、今年度は『発掘調査速報展』と『道後祝谷遺跡群出土資料展』を開催した。

その他では愛媛県歴史文化博物館・愛媛県生涯学習センターなどの講座への講師派遣、中学・高等学校の「総合的な学習の時間」への講師派遣をはじめ県内外の関係機関への調査協力などを通じて埋蔵文化財調査の普及啓発を行った。

(調査第一係長 岡田敏彦)

2 発掘調査を実施した遺跡の概要



平成15年度埋蔵文化財調査位置図(番号は各遺跡概要に対応)

かみぶんにし 1.上分西遺跡

- 1 所在地 四国中央市上分町
- 2 所属時期 縄文時代後期～中世
- 3 調査期間 平成15(2003)年4月1日
～平成16(2004)年3月31日
- 4 調査面積 4,000m²
- 5 調査原因 国道11号川之江三島バイパス建設
- 6 担当者 日和佐宣正 小野振一郎
- 7 調査概要

本遺跡は、宇摩平野東部を流れる最大河川である金生川によって形成された扇状地の扇央西端部に立地する遺跡で、15年度は6・7区の発掘調査を実施した。

6区の1面目(中世)では、流路1条、土坑2基、柱穴137基を検出した。調査区内を湾曲して流れたのち消失する流路は、明治以降の染付等が出土していることから、新しいものと判断した。土坑のうち1基は、柱穴の掘り方と判断した。

柱穴から掘立柱建物プランを復元すると、掘立柱建物4棟が確認できた。内3棟は調査区外に延びるため確定的ではないが、調査区内に収まる1棟の桁行方位はN-44°-Wであった。この方位は昨年度調査の3区及び4区で多数検出された掘立柱建物の方位の一つと同じものである。

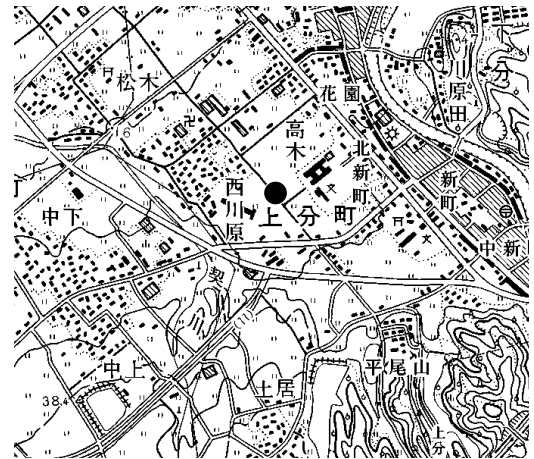
1面目の遺構を完掘した後、黄灰色の包含層を除去し、2面目(中世)の遺構を検出した。2面目では、土坑1基、柱穴14基を検出した。この柱穴からは掘立柱建物の復元はできなかった。

なお、地山相当の黒褐色砂礫層及び黄褐色シルト層からは縄文土器が出土している。

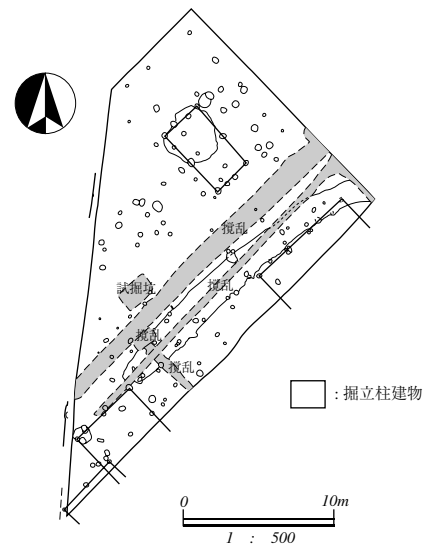
7区は自然地形の凹凸が著しく、黄灰色シルト層上面に柱穴状の遺構が確認されたため、これを1面目の遺構面(中世)とした。

この1面目では、土坑9基、柱穴59基を検出した。柱穴から掘立柱建物プランを復元したところ1棟が復元可能で、建物の桁行方位はN-53°-E (N-37°-W)であった。この方位は昨年度調査の3区及び4区で多数検出された掘立柱建物の方位の一つと同じものである。

1面目の遺構を完掘した後、黄灰色の包含層を除去し、2面目(弥生時代～中世)の遺構を検出した。2面目では、土坑31基、柱穴358基、性格不明遺構7基、自然流路3条、溝状遺構等を検出した。



位置図



6区1面目遺構配置図



現地説明会風景

調査区の北部に見られる自然流路は、時代とともに流れが南に移っている。そのうち最も新しいとされる南端の流路は、性格不明遺構(集石遺構)の北部を削り取って流れていた。この集石遺構は須恵器の杯を伴っており、古代の遺構と判断される。また、流路内からは須恵器が複数点出土している。このことから、これらの流路は昨年度調査の1区及び2区で検出された最大幅9.5m、最深1.6mの自然流路と形成時期や埋没時期が共通している可能性がある。

柱穴からは、4棟の掘立柱建物の復元が可能である。これらの桁行方位は、N-38°-W、N-50°-W、N-50°-E(N-40°-W)、N-53°-E(N-37°-W)であった。

調査区の北端と南端では弥生時代の土器を含む遺構が確認されている。なかでも、SX204・SX206からは弥生時代後期の土器が大量に出土しており、東南東-西北西方向に土器の集中が見られた。この方位は金生川扇状地の扇頂方向であり、金生川から派生する自然流路の旧河道痕跡を示すものと考えられる。

また、SX201とSX203は検出された形状及び埋土から噴砂の痕跡と考えられ、SX201についてはトレンチで噴出した箇所を確認した。

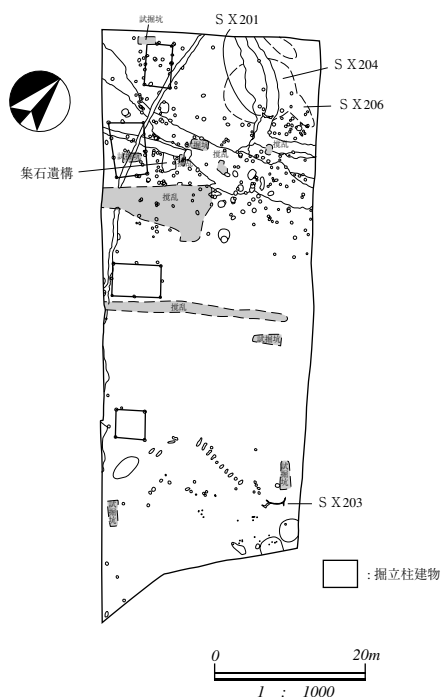
昨年度からの成果を併せ考えると、この遺跡には大きく三つの形成のピーク(弥生時代後期、中世I期、中世II期)があるものと思われる。弥生時代に属する遺構は、概ね金生川扇状地の扇頂方向に規制されている。また、古代から中世に機能したと考えられる自然流路もまた同様である。しかし、中世の掘立柱建物のプランにおける方位はほぼ北西-南東方向であり、中世I期の遺構成立に際し、あるいはそれ以前に本遺跡周辺の大規模な開発が進められたものと考えられる。本遺跡の中世面は、自然地形の凹凸が著しく、検出面による時期区分が困難であるため、遺構の方位による分類を復元した掘立柱建物のプランから検討すると、概ねN-37°-W前後とN-42°-W前後とに方位の集中が見られ、層位との関連からN-42°-Wを指向する遺構が中世II期となる可能性が高い。中世における2時期については、13世紀から14世紀の前半に収まるものと考えられ、この間に現代の景観に繋がる地割が整備されたものと思われる。

なお、平成16年1月31日(土)に一般向けの現地説明会を実施した。調査事業の概要を説明した上で、調査区内で遺構の解説を行った。併せて、昨年度の調査状況を図や写真パネルで展示し、主な出土遺物を陳列して解説を行った。当日は約350名の見学者が訪れた。

(日和佐宣正)



7区1面目遺構配置図



7区2面目遺構配置図

2. 松原遺跡

- 1 所在地 新居浜市寿町
- 2 所属時期 弥生時代中期
- 3 調査期間 平成15(2003)年7月1日
～平成15(2003)年9月19日
- 4 調査面積 1,100m²
- 5 調査原因 国道11号新居浜バイパス建設
- 6 担当者 中野亮 若杉美香
- 7 調査概要

本遺跡は、新居浜平野の南側、国領川左岸の複合扇状地(標高約32m)に立地している。

新居浜バイパスにおいては、平成12年度に星原市東遺跡、平成13年度に星原市遺跡の発掘調査を行い、弥生時代・中世・近世の遺構・遺物が確認されている。

今回調査を行った松原遺跡は弥生時代中期の遺跡である。遺構は竪穴住居、土坑、小穴が検出されており、遺物は弥生土器の壺・甕・高杯、紡錘車、石器(石鏃・作業台)が出土している。

竪穴住居で全体形状がよく分かるものは3棟である。SI-001は直径が7m近くある大型の住居で、SI-002は遺存状態が比較的良くセンターピットや柱穴の配置がよくわかるものである。SI-003は他の住居と違い長方形を呈し、埋土中に多量の遺物を含んでいた。竪穴住居は星原市東遺跡でも弥生時代中期のものが検出されており、時期により規模や形状の変化があることがうかがえる。また、同じ時期でありながら円形と長方形の2種類の平面形状のものがあることから、集落内での各住居における機能の違いがあったことが考えられる。

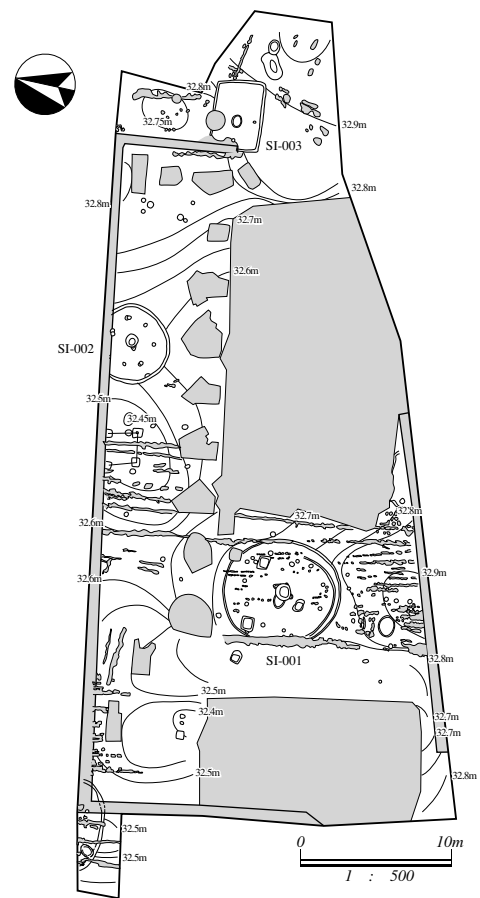
遺物は残存状態が良いものも多く、形態の特徴をよく看取することができる。弥生土器は口縁端部が上下に肥厚し、そこに凹線が巡らされており、体部外面に明瞭なミガキが入っているものが多い。なかでも壺は、口縁端部に棒状浮文が貼り付けられたもの、頸部に烈点文が巡らされているものなど装飾が著しい。これらの土器は中予地域出土のものとは異なり、香川県出土の弥生土器と類似している。SI-003から出土した一括性の高い土器群を中心に本遺跡の遺物を検討することにより、この時期の集落の様相を考えることが出来る。

今回調査した中で検出された遺構・遺物は、この時代の新居浜平野における集落のあり方や、遺跡の独自性、他地域との交流について考えるうえで有効な資料になると思われる。

(若杉美香)



位置図



遺構配置図



SI-003遺物出土状況

3. まつのちょう 松ノ丁遺跡

- 1 所在地 周桑郡小松町北川松ノ丁
- 2 所属時期 弥生時代中期初頭 奈良・平安時代
- 3 調査期間 平成15(2003)年11月4日
～平成16(2004)年2月3日
- 4 調査面積 2,000m²
- 5 調査原因 国道11号小松バイパス建設
- 6 担当者 柴田昌兎 土井光一郎 立花 卓
中野邦子

7 調査概要

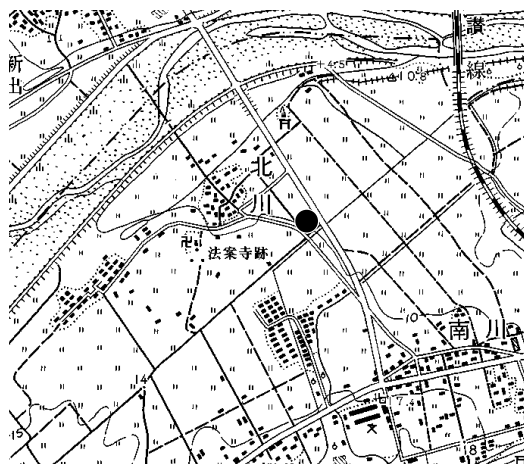
本遺跡は、道前(周桑)平野の主要形成河川・中山川の右岸、扇状地性氾濫原が三角州低地へ移化する付近の発達した河岸段丘上(標高約9～10m)に立地している。調査区の西450mには7世紀後半の創建と考えられている国史跡法安寺跡が所在している。

本調査では竪穴住居11棟、掘立柱建物9棟、柵列2条、条里溝1条のほか、土坑や小柱穴群が検出された。

竪穴住居のうち1棟には造りつけのカマドが付設されていた。掘立柱建物には柱穴の掘り方の構造が異なる建物が認められ、それらは築造時期の差として把握することができる。これら掘立柱建物の中には総柱構造の建物も含まれている。竪穴住居と掘立柱建物の時期は、その出土遺物から7世紀後半から9世紀末頃と考えられ、竪穴住居と掘立柱建物の共存する時期から掘立柱建物のみで構成される時期へと変遷する過程が看取できる。また8世紀第3四半期の掘立柱建物の柱穴内からは製塩土器や赤色塗彩土師器、他地域からの搬入と考えられる土師器が出土している。建物の規模や遺物組成からこれらに居住する集団が高位階層であることを想定することができる。竪穴住居はその方向性にばらつきがあるものの、8世紀以降の建物、特に掘立柱建物は概ねN-41°-Wあるいはそれに直交する方向に規制されていることが指摘できる。これは条里方向に一致している。遺構出土遺物には上述したものの他に鉄滓や黒色土器などが認められる。

検出された遺構・遺物の所属時期や経営期間から考えて本遺跡は、法安寺跡と同時併存していることが指摘できる。特に検出された竪穴住居は法安寺創建時に共存している可能性が高く、居住していた集団の性格も含めて、法安寺との関連が注目できる。

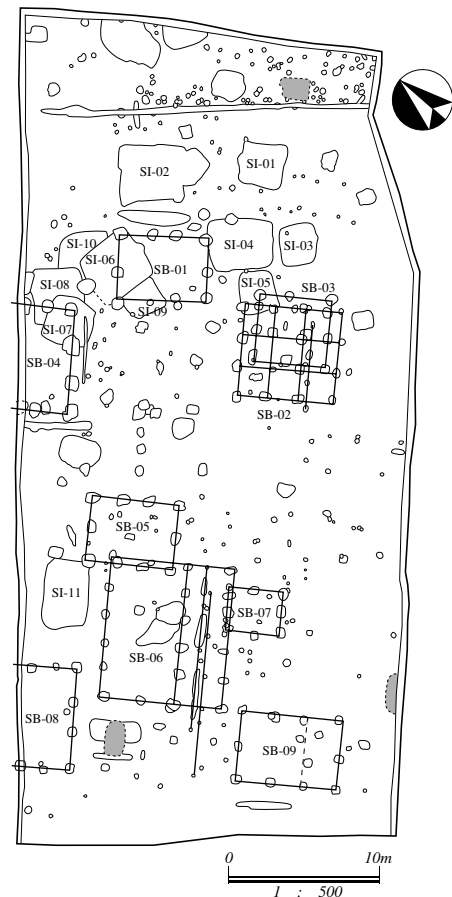
(柴田昌兎)



位置図



調査区全景(西から)



遺構配置図

おおびらき

4. 大開 遺跡

- 1 所在地 周桑郡小松町北川大開
- 2 所属時期 弥生時代中期前半 奈良・平安時代
- 3 調査期間 平成15(2003)年11月4日
～平成16(2004)年3月31日
- 4 調査面積 3,800m²
- 5 調査原因 国道11号小松バイパス建設
- 6 担当者 柴田昌兎 土井光一郎 立花 卓
中野邦子

7 調査概要

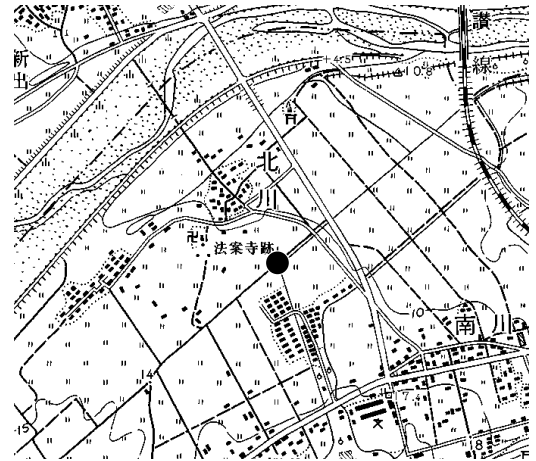
本遺跡は、道前(周桑)平野の主要形成河川・中山川の右岸、扇状地性氾濫原が三角州低地へ移化する付近の発達した河岸段丘上(標高約11～12m)に立地している。調査区の北西250mには7世紀後半の創建と考えられている国史跡法安寺跡が所在している。発掘調査は調査区を東側から1～3区に分けて実施した。

1区では掘立柱建物5棟、柵列4条、条里溝5条ほか、土坑や小柱穴群が検出された。掘立柱建物には柱穴の掘り方に布掘りを用いる建物が認められる。建物構造は2間×3間を基本としており、同一場所での建て替えも認められた。掘立柱建物や柵列の時期は、出土遺物が僅少で判然としないものもあるが、概ね8世紀から11世紀初頭ころに収まる遺構群と考えられる。

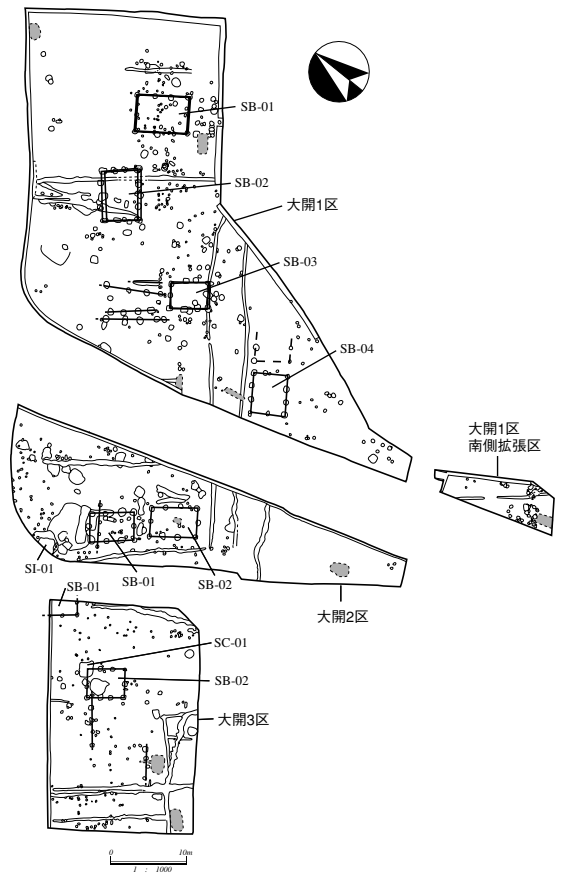
また、調査区の南側に新しい時期の遺構が集中する傾向が確認できた。掘立柱建物と柵列は、概ねN-41°-Wあるいはそれに直交する方向に規制されていることが指摘できる。検出された素掘小溝は、緩やかに湾曲したり、微妙に蛇行したりしているものの、概ねN-41°-Wまたはそれに直交する方向を指向しており、条里地割りに伴う坪界溝と素掘小溝と考えられる。これら条里地割りに伴う直交する溝を同時に検出できたことは、その配置分析を通して長地形や半折形の条里に伴う耕地区割りをも復元が可能になる成果である。

また、そのほかに弥生時代中期前半と考えられる遺構が検出され、弥生土器をはじめ、片岩製の磨製石庖丁や太型石斧も出土している。

2区では竪穴住居1棟と掘立柱建物2棟、柵列1条、条里溝5条ほか、土坑や小柱穴群が検出された。掘立柱建物には柱穴の掘り方に1区と同様の布掘りを用いる建物が認められた。建物構造は2間×3間を基本としており、同一場所での建て替えも確認できた。竪穴住居、掘立柱建物や柵列・土坑の時期は、出土遺物から8世紀から9世紀



位置図



1～3区遺構配置図



1区全景(西から)

末頃と考えられる。掘立柱建物と柵列は、概ねN-41°-Wの方向に規制されていることが指摘できる。検出された素掘小溝はN-41°-Wまたはそれに直交する方向を指向しており、条里地割りに伴う坪界溝と素掘小溝である。この素掘小溝群は、その配置から1区と同様の長地形や半折形の条里に伴う耕地区割りを復元できる遺構群である。また1区でも少ないながら検出されていた弥生時代の遺構は、本調査区でも確認できる。遺構の時期は弥生時代中期前半と考えられる。

3区では掘立柱建物2棟、鍛冶遺構1基、柵列2条、条里溝8条ほか、土坑や小柱穴群が検出された。建物構造は2間×3間を基本としているが、掘り方の構造は1区や2区で検出されたものに比べると簡素である。掘立柱建物や柵列・土坑の時期は、出土遺物から8世紀から9世紀末頃と考えられる。掘立柱建物と柵列は、概ねN-41°-Wあるいはそれに直交する方向に規制されていることが指摘できる。鉄滓が出土している鍛冶遺構は掘立柱建物廃絶後に形成されていた。また溝から出土した須恵器杯Bは、その高台部に墨痕が残存していることから転用硯と考えられる。このことから本遺跡に居住する集団が識字階層であることが想定できる。素掘小溝はN-41°-Wまたはそれに直交する方向を指向しており、条里地割りに伴う坪界溝や素掘小溝である。これらは、その配置から他の調査区と同様に長地形や半折形の条里に伴う耕地区割りを復元できる遺構群である。

本遺跡では1・2区で検出された掘立柱建物の配置をみるといわゆる「コ」字形配置であることから官衙風の建物があったと考えられる。識字階層を示す転用硯の存在も含めて考えると官衙関連施設であった可能性が高い。また、この遺跡も松ノ丁遺跡と同様に法安寺に近接し、同時併存していることから、その関連性は十分に指摘できそうである。そして各調査区で検出された条里に伴う素掘小溝群は、条里地割りの復元やその耕地区割りの状況を検討するうえで大きな成果を上げることができた。

(柴田昌児)



2区全景(北から)



2区土坑から出土した弥生土器



3区全景(東から)



3区溝から出土した須恵器杯

おうぎだ

5. 扇田遺跡2次調査

- 1 所在地 周桑郡丹原町願連寺
- 2 所属時期 弥生時代中期中葉～後葉
- 3 調査期間 平成15(2003)年6月20日
～平成15(2003)年7月25日
- 4 調査面積 105m²
- 5 調査原因 県道壬生川丹原線整備
- 6 担当者 槇光一郎 兵藤千晶
- 7 調査概要

本遺跡は、道前平野のほぼ中央に位置しており、中山川の氾濫により形成された沖積低地上(標高12m)に立地している。

調査区は、県道に沿って細長く、遺跡の南西側では平成14年度にも調査を実施しており、中世(12～15世紀)の遺構を検出している。

調査前の現況は、家屋跡であり、家屋取り壊し時において、多くの攪乱を受けていた。そのため、前述した中世の遺構を検出することができなかった。

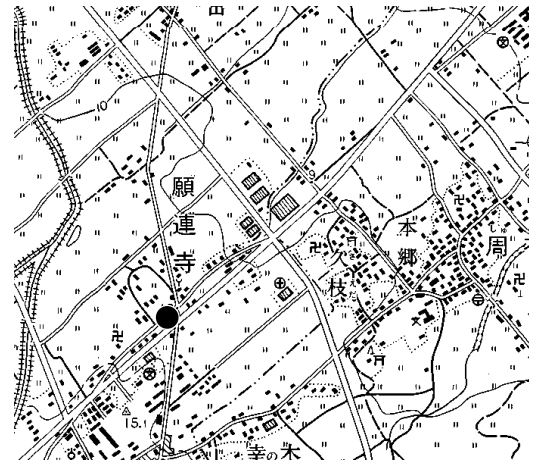
調査の結果、本遺跡においては、弥生時代中期の遺構遺物を検出することができた。遺構は竪穴住居1棟(SI01)、土坑1基、柱穴20基を検出した。竪穴住居は、調査区の北東に位置しているが、調査区が狭いため遺構の一部のみの検出であった。残存している平面プランから平面形は、円形をしていると思われる、規模は、直径約6.5mと推定される。遺物は、弥生時代中期の甕の土器片がまとまった形で出土した。出土した土器の胎土には結晶片岩が含まれていることから、久枝遺跡で発掘された弥生土器と同じく中山川南側の土で作られていると考えられる。住居跡からは、試掘調査においても弥生時代中期の壺が出土している。

土坑・柱穴からは、時期を特定する遺物は出土しておらず、また、建物跡と考えられるものもなかった。ただ、その内柱穴2基は、遺構埋土から判断すると南西側の調査区で検出された中世の遺構である可能性が高い。

そのほか、包含層資料ではあるが、弥生時代中期前半の細頸広口壺の口縁部が直立で出土している。

今回調査した遺跡からは、隣接する久枝II遺跡・願連寺遺跡(仮称)と同時期の遺構・遺物が出土しており、今後の報告書作成作業において周辺遺跡の成果を含め比較検討していく必要がある。

(槇光一郎)



位置図



SI01 遺物出土状況



SI01 完掘状況



遺物出土状況

ほんごういち

6. 本郷I 遺跡

- 1 所在地 東予市周布
- 2 所属時期 古墳時代終末
- 3 調査期間 平成15(2003)年12月1日
～平成16(2004)年1月21日
- 4 調査面積 200m²
- 5 調査原因 県道壬生川丹原線整備
- 6 担当者 榎光一郎 兵藤千晶
- 7 調査概要

本遺跡は、道前平野のほぼ中央部に位置しており、中山川の氾濫により形成された沖積低地上(標高7m)に立地している。

調査区は、県道に沿って細長く、北東側では平成11年度に、南東側でも平成13年度に調査を実施しており、古墳時代～中世の遺構を検出している。

調査の結果、本遺跡からは、6世紀後半の遺構・遺物を検出することができた。遺構は、溝2条、柱穴1基、自然流路2条を検出した。

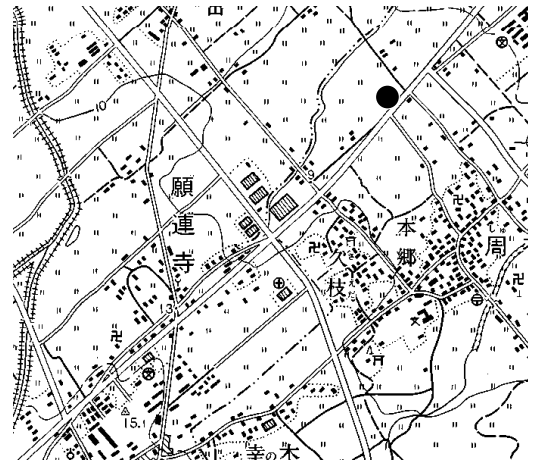
溝(SD01・SD02)は調査区の東側にあり、SD01は、主軸方向N-95°-Wに延びており、SD02は、主軸方向N-66°-Wに延びている。両者は、調査区北壁において交わっている。遺物は出土していない。

自然流路(SR01)は、調査区の南西から北東へ向いて、調査区中央部まで流れ、中央部より東に屈曲していると考えられる。流路の北側の落ち込み部分を検出したのみであるので、全体像は把握できていない。自然流路(SR02)は調査区中央部を北西から南東方向に向いて延びており、SR01に流れ込む。幅約2.1～2.4m、最大の深さ約0.5mである。埋土は、黄灰色の粘土層など、水の影響を大きく受けている。埋土より、須恵器・土師器・木器・核果類が出土した。

SR02から出土した板状の木器は、縦約80cm、横約50cm、厚さ約4cmであり、やや小振りではあるが、高床式倉庫の観音扉の一片である可能性がある。

道前平野に形成された沖積低地の古墳時代の集落の一端を明らかにする資料を得ることができた。また、集落の全容は明らかにされなかったが、前述の木器が検出されたことから周辺に集落の広がりと考えられる。周辺の遺跡との関連について考察を深めたい。

(榎光一郎)



位置図



SR02 遺物出土状況



SR01・02 完掘状況

まつぎいけ 7. 松木池遺跡

- 1 所在地 東予市実報寺
- 2 所属時期 縄文時代後期～弥生時代
- 3 調査期間 平成15(2003)年9月1日
～平成15(2003)年9月30日
- 4 調査面積 800m²
- 5 調査原因 県道孫兵衛作壬生川線整備
- 6 担当者 榎光一郎 兵藤千晶
- 7 調査概要

本遺跡は、世田山より道前平野に延びる尾根の南側先端の低丘陵部に立地している。また、北川の支流によって形成された実報寺谷東端の河岸段丘状の浅い開析谷西端にため池である松木池があり、埋蔵文化財包蔵地である「松木池遺跡」の範囲は、ため池底及び池の東側約210m、幅約120mの範囲で、本調査区はその北東端に位置している。

調査の結果、弥生時代中期の遺構と縄文時代後期の遺構を確認することができた。

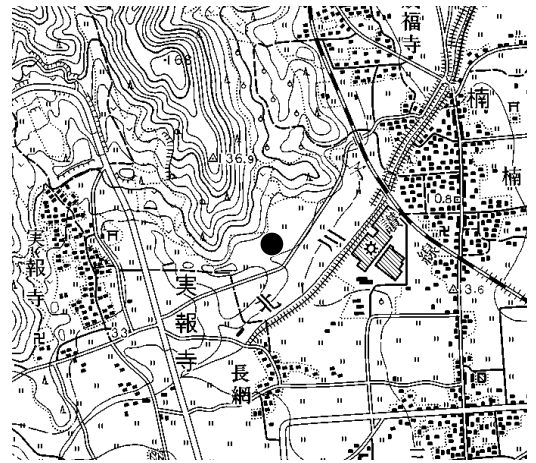
弥生時代の遺構としては、柱穴11基を検出した。柱穴からは弥生土器片と弥生時代中期の磨製石斧・敲石が各1点出土した。土器片は、いずれも少数であり明確な時期の特定には至っていない。

縄文時代の遺構としては、自然流路2条、柱穴41基、性格不明遺構1基を検出した。自然流路(SR01)は、調査区の西壁中央から北東方向に蛇行しながら流れている。埋土は、幾重にも重なった砂である。遺物は縄文時代後期の土器片が、数多く出土した。また、サヌカイトの石鎌やスクレイパーなどの石器が数点出土した。縄文土器片については、摩耗がはげしく流路を流れる中で削られたものであると考えられる。自然流路(SR02)は、調査区の西壁南側から東方向に流れている。遺物は、ほとんど出土していないが、壁の断面からSR01と同じ時期と考えられる。柱穴は41基を検出したが、積極的に建物跡と考えられるものはなかった。

その他、包含層資料として、弥生土器、須恵器、備前焼、土師器が出土している。

道前平野に形成された河岸段丘における縄文遺跡の良好な資料を得ることができた。今後の整理作業において、北川を挟んで隣接する福成寺遺跡・旦の上遺跡との関係についても考察を深めていく必要がある。

(榎光一郎)



位置図



SR01 完掘状況



完掘状況

8. 世田山IV号墳

- 1 所在地 東予市六軒家
- 2 所属時期 古墳時代
- 3 調査期間 平成15(2003)年10月1日
～平成15(2003)年11月21日
- 4 調査面積 150m²
- 5 調査原因 県道孫兵衛作壬生川線整備
- 6 担当者 楨光一郎 兵藤千晶
- 7 調査概要

本遺跡は、世田山麓に舌状に延びる丘陵の西側中腹(標高46m)に立地している。

調査の結果、古墳時代の横穴式石室を持つ直径約12mの円墳を検出した。

墳丘上部は、ほとんど削平されており、地山層の上に盛土の一部と思われる堆積が見られた。

墓坑は、尾根線に沿って地山層を掘り下げており、平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は検出短軸2.55m、深さは奥壁側の最深部で1.42m、長軸は不明である。

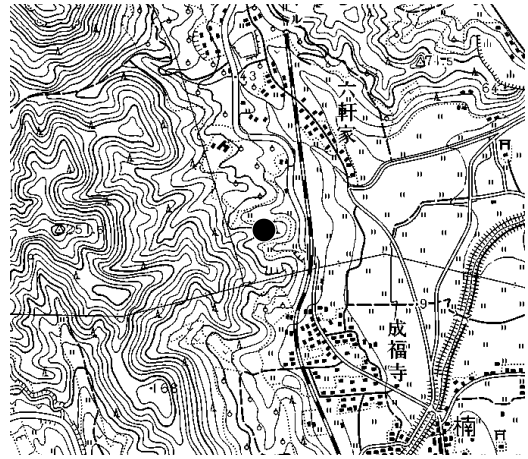
石室は、主軸方向N-76°-Eを指向し南西に開口する両袖の横穴式石室である。石室の規模は長さ3.69m、現存幅0.58m(袖幅)～1.41mを測る。壁体の遺存状況は、天井石が一つ転落した状態で他は失われ、右側壁も1段目(規定石)が残るにすぎない。羨道部においても右側壁は、全て失われている。石室の裏込め土は、細粒と粘質性の土で、交互に版築状に固められている。

玄室の規模は室長2.48m、幅1.26m～1.41m、現存高0.39m～0.93mを測る。平面形態は長方形で若干の胴張りが見られる。

側壁は1段目に上部と比べて大きな割石を使用し、もち送り状に積んでいる。奥壁は大きな板状の1枚岩で構築されている。床面は、径2cm～17cmの花崗岩の割石が敷かれ、礫床である。玄門は玄門立柱石を配しており、その玄門立柱石で袖の形態を呈しているが、左右共に盗掘時に若干移動していると思われる。赤色顔料と見られるものが、奥壁右部分や床の一部から検出された。

遺物は、石室内より須恵器片・鉄製品・玉類が出土している。須恵器片は、杯・杯蓋の破片が大部分で、鉄製品はほとんどが鉄鏃の一部と思われる破片であり、玄室奥の右側からまとまって出土している。玉類は、滑石の白玉1点・土玉33点が、玄室奥の左側からまとまって出土している。

出土した遺物から少なくとも1回の追葬が行われたと



位置図



石室検出状況



玄室内状況

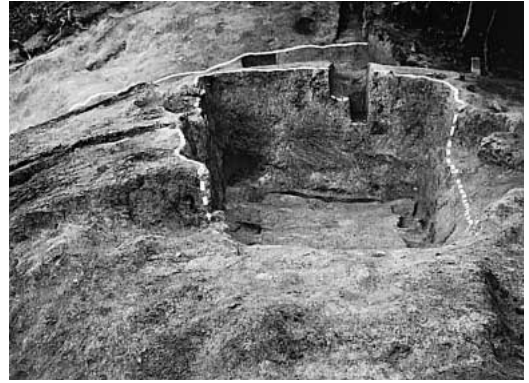


周溝完掘状況

考えられる。

古墳の築造時期は、出土した須恵器片から5世紀後半ないし6世紀初頭と考えられ、6世紀後半ごろに追葬が行われたと考えられる。道前平野に築造された古墳の一形態を把握する資料を得ることができた。周辺古墳との比較を中心に、今後の整理作業を進めていく必要がある。

(榎光一郎)



墓坑完掘状況

ごうさくらいほり

9. 郷桜井堀遺跡

- 1 所在地 今治市郷桜井1丁目6-11、12
- 2 所属時期 中世
- 3 調査期間 平成15(2003)年7月14日
～平成15(2003)年8月8日
- 4 調査面積 170m²
- 5 調査原因 県道桜井山路線改良工事
- 6 担当者 三好一史 鎌土奈々
- 7 調査概要

本遺跡は今治平野南端に位置し、北を唐子台独立丘陵、南西を霊仙山・笠松山、南東を向山から延びる山塊に囲まれた沖積低地に営まれた集落遺跡である。

本遺跡のすぐ南には「国分尼寺跡」と推定される周知の埋蔵文化財包蔵地「桜井小中学校遺跡」があり、古代の瓦が多数出土し、校舎等の改築工事の際には礎石と考えられる巨石が掘り起こされたという伝承もある。

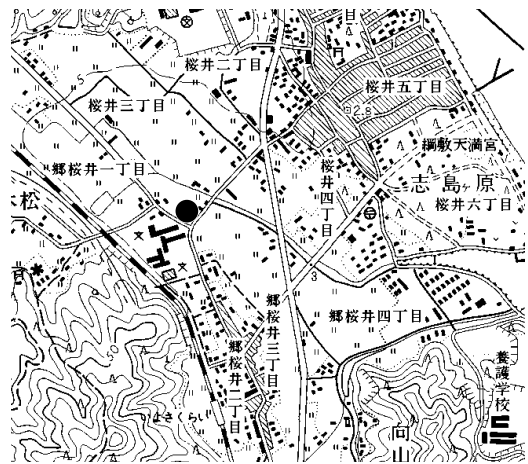
今回の調査は県道拡幅工事に伴うものである。調査区は北東-南西に長い不整形な長方形で、現地表面の標高は約3.2mである。

基本層序は6層に分層した。上から、造成土(I層)・水田耕作土(II層)・床土(III層)・灰色を呈する細礫混じり粘土層(IV層)・暗オリーブ色を呈する粘土混じり砂層(V層)・黄褐色を呈する砂層(VI層)で、IV層・V層が中世の遺物包含層である。IV層下面が第1遺構面、V層下面が第2遺構面であるが、出土遺物から見てほとんど時期差はないものと考えられる。VI層は頓田川・大川により運ばれた河川堆積物である。

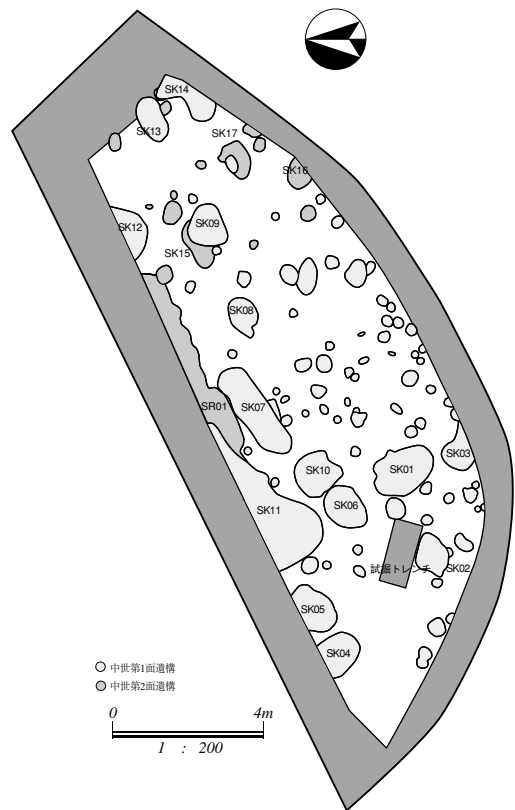
検出遺構は土坑17基、柱穴(小穴)84基と自然流路1条である。遺物や遺構相互の重複関係から判断して、13世紀初頭に自然流路が埋没したのち、集落が営まれたものと考えられる。土坑や柱穴は最も標高が高い調査区の南東側に集中していることから、集落の中心は、調査区の南東に接する県道から桜井小中学校付近にかけての微高地にあり、調査区は微高地から低地へ向けての斜面に位置しているものと考えられる。

また、包含層から出土した瓦・鉄滓などの破片は、微高地上から低地へ向かって廃棄されたものと考えられる。調査区の西には、鎌倉時代を盛行期とし室町時代に廃絶した集落である郷桜井八反地遺跡(1993.今治市教育委員会)が隣接していて、本遺跡はその集落の一部である可能性も考えられる。

(三好一史)



位置図



遺構配置図



第1面完掘状況

こうちくりたによんごうふん
10. 高地栗谷4号墳

- 1 所在地 今治市高地
- 2 所属時期 古墳時代中期
- 3 調査期間 平成15(2003)年5月6日
～平成15(2003)年8月6日
- 4 調査面積 1,500m²
- 5 調査原因 今治新都市開発
- 6 担当者 山内英樹 木原貴子
- 7 調査概要

本古墳は、今治平野北西部に広がる丘陵部に位置し、標高84mを最高地点とする。今治市教育委員会による試掘確認調査では「円墳もしくは前方後円墳の可能性」が指摘されていたが、発掘調査の結果、最大径約20m、高さ2～2.5mのやや楕円形を呈する円墳であることが確認された。墳丘は地山である花崗岩を一部整形して築かれており、墳頂部には本来若干の盛土があったものと推測される。また、墳丘と尾根部を区画するための小規模な周溝も確認されている。

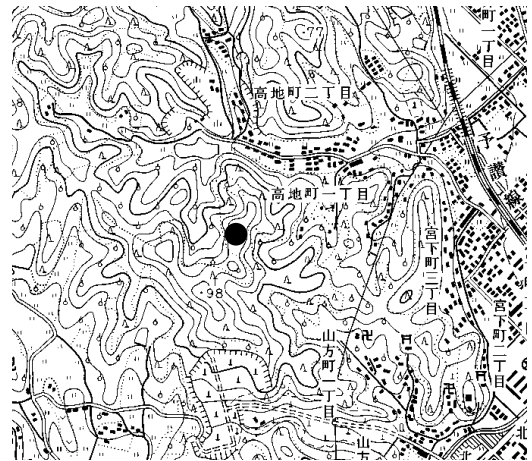
丘陵頂部には、主軸を概ね東西方向に配置した埋葬主体が2基並列して検出されている。ともに二段墓坑で、本来は木棺が納められていたと思われる。第1主体部は規模(3.0m以上×1.6m)や構造において隣接する第2主体部(2.3m×1.1m)を上回っており、いずれも墳丘築造当初より計画的に墳頂部に配置されたものである。

第1主体部では墓坑下段内より鉄刀1(折り曲げた状態での副葬か)、鉄鏃20以上(2群に分かれて東となっている)、墓坑直上(上段)より鉄鉾1が、良好な状態で出土している。副葬品配置も明確に確認出来ることにより、本来頭位は東であったと推定される。

また第2主体部では、墓坑やや東寄りに、滑石製模造品(勾玉1)および滑石製の白玉約60個が出土している。鉄製品の出土はないものの、玉類の出土状態より、第1主体部同様、頭位は東であったと推定される。

以上の点から、本古墳は当地域の有力首長層の古墳であることが明らかであり、出土した豊富な鉄製品や墓坑内への「折り曲げ鉄刀」の副葬行為など、県内では数少ない貴重な情報を提供するものである。なお、当古墳の所属時期については、鉄製品や滑石製勾玉より判断して、概ね4世紀末から5世紀前半にかけてのものと現段階では捉えている。

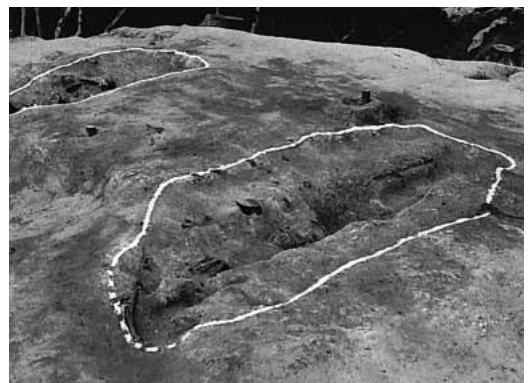
(山内英樹)



位置図



古墳遠景



第1・2主体部配置



第1主体部 鉄刀出土状況

あがたずおうじゅうに

11. 阿方頭王XII遺跡

- 1 所在地 今治市阿方
- 2 所属時期 弥生時代中期後半～古代
- 3 調査期間 平成15(2003)年3月15日
～平成15(2003)年5月20日
- 4 調査面積 500m²
- 5 調査原因 今治新都市開発
- 6 担当者 池尻伸吾 越智憲悟 大庭美鈴
- 7 調査概要

本遺跡は、今治平野の北西部に広がる丘陵地帯に位置し、低丘陵に挟まれた小規模な開析谷に立地する。調査区はこの開析谷の谷底から西側丘陵斜面の裾部にあたり、標高32～37mの地点に位置している。

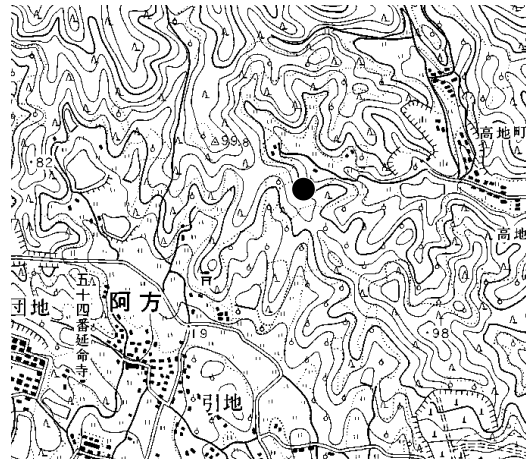
本遺跡南東側一帯では、昨年度調査を行った阿方頭王VIII遺跡や阿方頭王X遺跡等の調査成果から、弥生時代中期後半の丘陵性集落が面的に展開している状況が確認されており、やや距離を置いてその北西側の阿方牛ノ江地区一帯には古代の集落跡が広がりを見せる。

調査の結果、本遺跡から弥生時代中期後半～古代の遺物が確認されたが、調査区の中央部をほぼ東西方向へ流下する自然流路状の落ち込みを検出したほかは、調査区全体が丘陵裾部から谷底にかけて大きく傾斜しているためか、それらに伴う遺構の存在は確認できなかった。

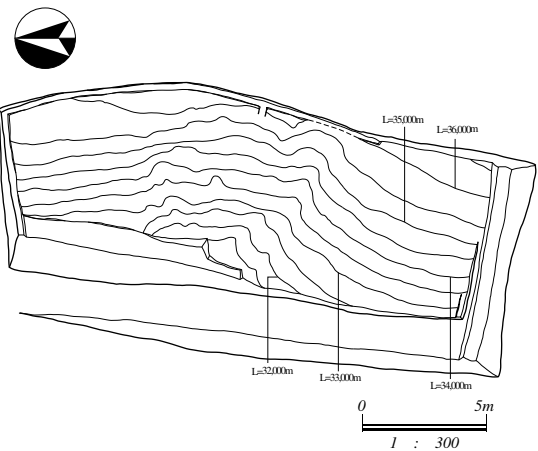
遺構の存在は確認できなかったものの、この自然流路状の落ち込みや谷底付近からは、阿方頭王IX遺跡（今年度調査実施）が所在する調査区東側の丘陵斜面および丘陵頂部付近から流れ込んだものと考えられる多量の弥生土器や石器が出土しており、一括性を欠くものの弥生時代中期の土器や石器の様相を考えるうえで参考となる資料を得ることができた。遺物は量的に弥生土器（壺・甕・高坏・鉢）が主体を占めており、当該期においては類例の少ない「記号文」が施された完形品の壺形土器も確認されている。石器では、石鏃、石核、磨製石庖丁、打製石庖丁、磨製石斧、敲石、石錘等の多様な器種が出土している。

本遺跡では、遺構の存在が確認されなかったものの、その反面多量の出土遺物に恵まれており、阿方頭王地区一帯に展開する弥生時代中期後半の丘陵性集落群の実態を今後考えていくうえでの補完資料として、十分に有用性を持つものであると考えられる。

(池尻伸吾)



位置図



遺構配置図



完掘状況



自然流路状落ち込み 遺物出土状況

あがたずおうじゅういち
12. 阿方頭王XI遺跡

- 1 所在地 今治市阿方
- 2 所属時期 弥生時代中期後葉～後期
- 3 調査期間 平成15(2003)年7月30日
～平成15(2003)年8月29日
- 4 調査面積 900m²
- 5 調査原因 今治新都市開発
- 6 担当者 山内英樹 小笠原啓二 中島弘二
木原貴子
- 7 調査概要

本遺跡は、今治平野北西部に広がる低丘陵の東側斜面部に位置し、標高は51～60mである。今回の調査の結果、弥生時代中期を中心とする遺構が確認され、包含層および遺構内からは多量の遺物が出土した。

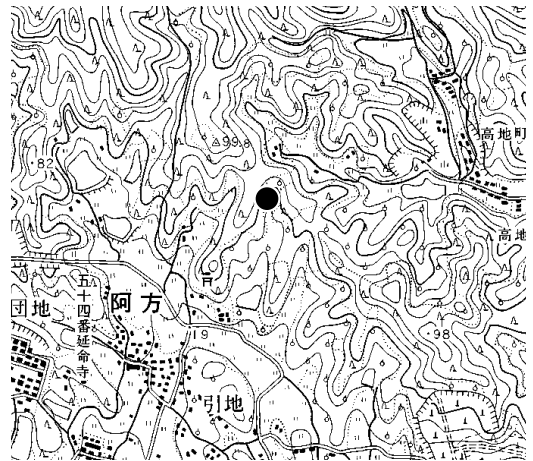
主な遺構としては、段状遺構3基、竪穴住居跡2棟(切り合い関係有り)、柱穴が見られるが、その範囲は丘陵頂部付近ではなく、かなり下がった傾斜地に密集し、段上遺構はほぼ同レベルに立地する傾向が窺える。また、段状遺構は若干の切り合い関係を持つものの(段状遺構3→段状遺構1)、出土する弥生土器からは明確な時間差は見出せない。段状遺構1の前面には比較的大型の柱穴が存在し、本遺構に付随する可能性も考えられる。

竪穴住居跡SI01・02は、平面形がやや方形を呈しており、内部には若干付随する柱穴が確認されている。住居跡奥側には壁溝が見られ、その内部および床面直上付近には弥生土器片・サヌカイト片が出土している。所属時期は段状遺構とほぼ同じ弥生時代中期後葉(「凹線文」期)と想定される。

そのほか、主な出土遺物としては、段状遺構1より緑色片岩製の石庖丁が出土している。また、段状遺構3からは、まとまった弥生土器(壺・甕・高杯)が集中して出土しており、廃棄あるいは置かれたものである可能性が高い。

以上の点から、本遺跡は、「凹線文」期の集落の様相、特に、本丘陵に展開する弥生時代中期後葉のほかの集落跡との相関性や、丘陵斜面部の土地利用を考える上で良好な資料を提示できたものと考えられる。また、本遺跡より斜面下部には、多数の弥生土器が出土している「阿方頭王XII遺跡」が所在しているが、この遺跡出土の遺物については、本遺跡からの転落という可能性も考えられる。

(山内英樹・小笠原啓二)



位置図



段状遺構1 石庖丁出土状況



段状遺構1 遺物出土状況

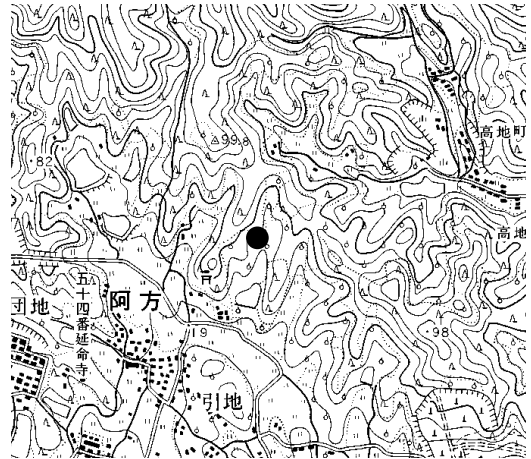


SI01・SI02 完掘状況

あがたずおうきゅう

13. 阿方頭王IX遺跡

- 1 所在地 今治市阿方
- 2 所属時期 弥生時代中期中葉～後期
- 3 調査期間 平成15(2003)年5月21日
～平成15(2003)年11月4日
- 4 調査面積 1,600m²
- 5 調査原因 今治新都市開発
- 6 担当者 山内英樹 池尻伸吾 小笠原啓二
越智憲悟 中島弘二 木原貴子
- 7 調査概要



位置図

本遺跡は、今治平野北西部に広がる低丘陵の一つ、標高40～50mの丘陵斜面部に位置する。本遺跡を含め、この丘陵斜面部には弥生時代の遺跡が多く所在する。

調査の結果、丘陵斜面部(尾根頂部に比較的近い箇所)に段状遺構7基、溝3条、土坑1基、柱穴6基、性格不明遺構1などが確認され、弥生土器をはじめとする数多くの遺物が出土している。

段状遺構は、大別して上段(段状遺構1・6)、中段(段状遺構2・3・4・5)、下段(段状遺構7)の3段に分かれてはいるが、大きな時間差は認められず、概ね弥生時代中期後葉をその中心としている。段状遺構1の出土遺物には、県内では比較的類例の少ない環状石斧が出土しており、共伴する弥生土器との関連性が注目される。

段状遺構2では大型の壺や砥石など、多種の遺物が出土層位を違えて出土しており、埋没過程を時間的に追える好資料である。

段状遺構5・6・7は縦に並んだ配列を呈している。弥生土器をはじめ、出土遺物は量的に非常に多く、石鏃や石庖丁などの石製品も含まれる。また、段状遺構6の平坦面(緩斜面部)には、周囲を溝に囲まれた炉と思われる遺構を2基確認しており、そのうち炉1は、焼土に挟まれた落ち込み中に、灰や炭を含んだ土が深く堆積しており、その構造が注目される。

本遺跡は、周囲に展開する同時期の遺構と比較してもかなり大型の遺構が多く、出土遺物の質・量ともにほかを凌駕する。また、本遺跡の展開する斜面部が比較的日当たりが良好な東・南を向いている点や、複数の切り合い関係を保ちながら展開している点からも、一丘陵内で中心的な役割を担っていたものと推測される。

(山内英樹)



遺構完掘状況



段状遺構2 遺物出土状況



段状遺構5 炉および周辺

あがたずおうなな
14. 阿方頭王VII遺跡

- 1 所在地 今治市阿方
- 2 所属時期 弥生時代中期～後期
- 3 調査期間 平成15(2003)年6月2日
～平成15(2003)年8月3日
- 4 調査面積 1,130m²
- 5 調査原因 今治新都市開発
- 6 担当者 小笠原啓二 中島弘二
- 7 調査概要

本遺跡は、今治平野北西部の南向きに延びる丘陵の頂部および東側斜面部に位置し、標高は40～50mである。今回の調査によって、弥生時代中期後葉の遺構が確認され、包含層および遺構内からは、多くの遺物が出土した。

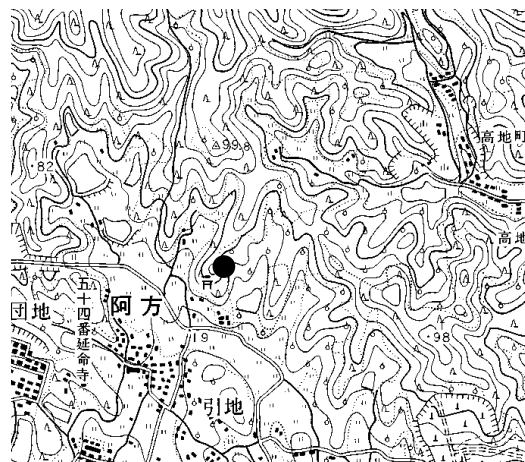
丘陵頂部に展開する遺構はその密度が低く、柱穴および土坑2基が確認されているに過ぎない。また、この柱穴は掘立柱建物を復元出来るものではなく、出土遺物も弥生土器の破片がわずかに出土する程度である。また、包含層中からは古墳時代後期(6世紀)の須恵器(杯蓋・杯身)が出土しているが、当該期の遺構は確認されていない。

丘陵斜面部では、谷中央部にかけて遺構面が2面展開しているものの、所属する時期はいずれも弥生時代中期後葉(「凹線文」期)であり、近接した時期での堆積であったことを示している。第1面では溝状遺構および柱穴が確認されているが、遺構の密集度は低く、遺物もまばらであるのに対し、第2面では、段状遺構2基、竪穴住居跡1棟、溝状遺構、柱穴など、近接した範囲で遺構が密集している点が異なっている。

注目される遺構としては、遺存状態の良い段状遺構1が挙げられる。その床面は被熱により赤変しており、被熱範囲も広く、周囲には炭化物も多く確認されている。また、遺構内の柱穴P2は内部に炭が詰まった状態で確認されており、その上部からは高杯の脚部片が据えられた状態で検出されている。出土遺物のなかには鉄滓や板状鉄斧も出土しており、鍛冶関連の遺構の可能性も考えられる。

本遺跡は「凹線文」期の集落の様相、特に段状遺構の斜面部への展開の在り方などを考える上で、貴重な資料を提供したものと思われる。

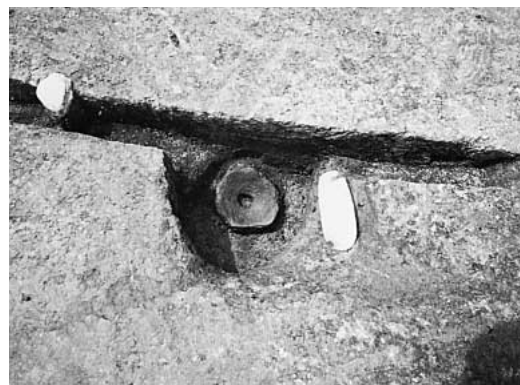
(小笠原啓二)



位置図



段状遺構1 完掘状況



段状遺構1 P2遺物出土状況



段状遺構2 遺物出土状況

べつみょうてらだにに

15. 別名寺谷II遺跡

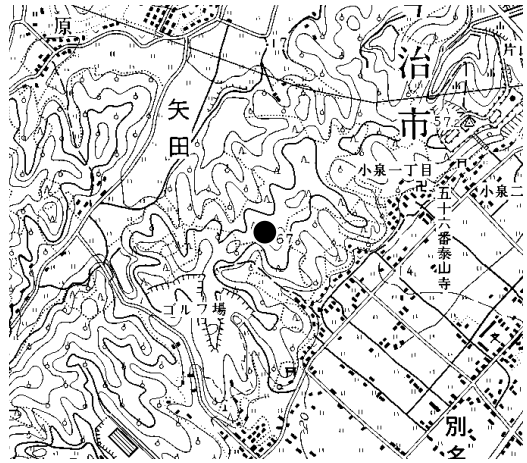
- 1 所在地 今治市別名
- 2 所属時期 古代(平安時代)
- 3 調査期間 平成15(2003)年8月25日
～平成15(2003)年10月3日
- 4 調査面積 1,700m²
- 5 調査原因 今治新都市開発
- 6 担当者 池尻伸吾 小笠原啓二
- 7 調査概要

本遺跡は、今治市西部に広がる日高丘陵の南部に位置しており、標高約53～63mの丘陵頂部および丘陵斜面部に立地している。同一の丘陵上には、昨年度調査を実施した別名端谷II遺跡が、また眼下の開析谷には古代の銅印や鍛冶炉が確認された別名端谷I遺跡や試掘の結果、古代の集落跡の存在が予想される別名寺谷I遺跡が所在している。調査の結果、本遺跡においてもこれらの遺跡とほぼ同時期のものと考えられる遺構・遺物が確認された。

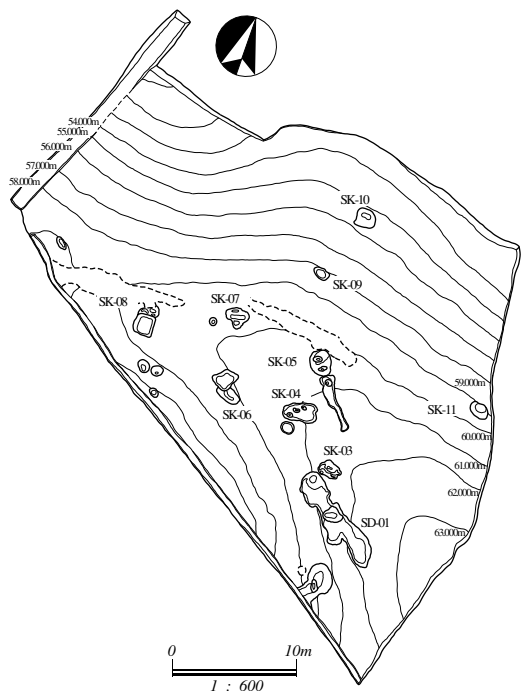
遺構としては、土坑11基、柱穴5基、溝状遺構6条が確認された。これらの遺構の配置には特別な規則性は認められないが、丘陵の頂部付近を中心に遺構が分布する傾向が認められる。時期を比定する資料に乏しいものの、調査区南東隅に位置する溝状遺構(SD-01)から、須恵器杯・杯蓋各1個体と須恵器甕の破片が数点出土している。遺構内および上位包含層からの出土遺物が極めて稀薄であったため正確には判断しがたいが、検出された遺構の状況や他の時期の遺物が確認されていないことから考えて、これらの遺構は時期的に古代(8～9世紀頃)に帰属する可能性が高いものと考えられる。

本遺跡の性格に関しては不明な部分が多く、同一の尾根筋に存在する別名端谷II遺跡(平成14年度調査実施)からも同時期の土坑群が検出されているが、本遺跡の土坑と同様に墓としての機能を想定することは困難である。また、遺構の構成から集落跡である可能性も極めて低く、本遺跡が遺跡単体で機能していた状況を想定することも難しい。従って、同時期の生産遺跡および集落跡である別名端谷I遺跡(平成14年度調査実施)や別名成ルノ谷遺跡(平成14年度調査実施)、また来年度調査予定であり、同時期の集落跡の存在が予想される別名寺谷I遺跡との関連性を軸として、その性格について今後検討していく必要がある。

(池尻伸吾)



位置図



遺構配置図



SD01 遺物出土状況

たかはしさやのたに
16.高橋佐夜ノ谷遺跡

- 1 所在地 今治市高橋
- 2 所属時期 弥生時代中期後半 古墳時代後期
- 3 調査期間 平成15(2003)年9月30日
～平成15(2003)年12月12日
- 4 調査面積 3,100m²
- 5 調査原因 今治新都市開発
- 6 担当者 池尻伸吾 小笠原啓二
- 7 調査概要

本遺跡は、今治市西部に広がる日高丘陵の一角、標高約63mを頂上とする丘陵頂部付近から丘陵斜面部に位置しており、調査の結果、弥生時代中期後半、古墳時代後期の遺構・遺物が確認された。

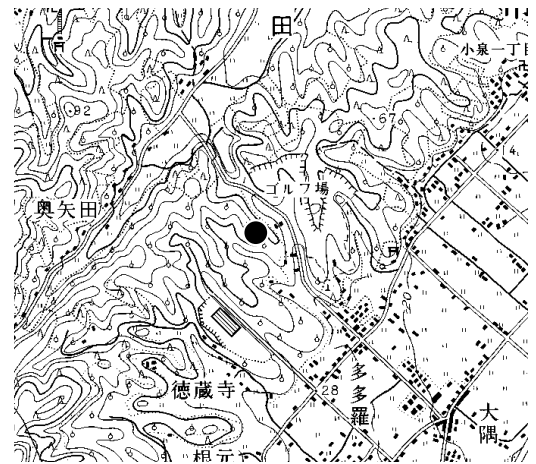
弥生時代の遺構には、竪穴住居跡1棟、段状遺構5基、溝状遺構1条、土坑5基があり、遺構の密度はやや散漫であるが、総体として弥生時代中期後半の丘陵性集落を構成している。遺構内からの出土遺物は概して稀薄であったが、竪穴住居と考えられるSI-01からは多量のサヌカイトが出土した。確認したサヌカイトのなかには、石器製作の際に生じる剥片、碎片が多数認められ、本遺構内で集中的に石器製作作業を実施していた状況が想定される。器種としては石鏃、楔形石器、削器類があり、なかでも石鏃は多数検出された。また、同住居跡の床面からは緑色凝灰岩製の管玉1点が出土している。

ほかの遺構については、出土遺物が少なく性格は不明であるが、丘陵西側斜面に位置する段状遺構(DAN-02)には、甕形土器のミニチュア品が、またDAN-03床面状には焼土の広がり確認された。

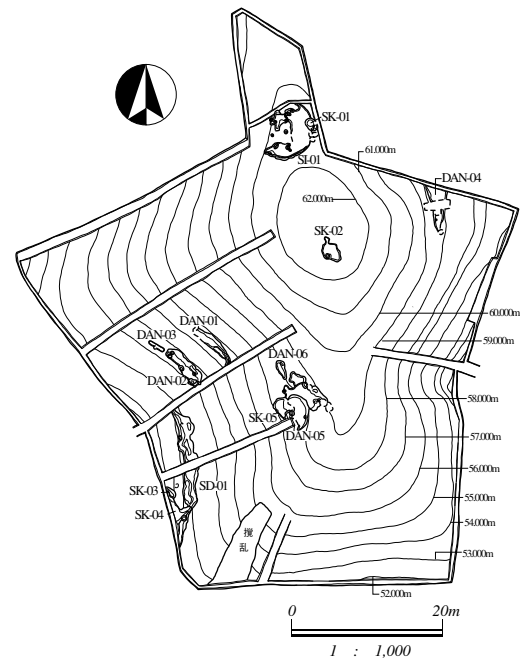
古墳時代後期の遺構としては、丘陵頂部から土坑(SK-02)が確認されたのみであり、土坑周辺の包含層から須恵器杯身や短頸壺の破片が少量出土した。

本遺跡は、主に弥生時代中期後半を中心とする丘陵性集落であり、昨年度調査を実施した阿方頭王地区に展開する同時期の丘陵性集落群と類似する遺構の構成を持つことが明らかになった。ただし、丘陵頂部付近に住居跡が存在する点や石器製作作業を集約的に行う状況等、阿方頭王地区における集落跡とは異なる現象が認められている。今後は、これら低丘陵上に立地する集落の遺構配置や生業に関する異同を相互的に検討していくとともに、周辺に位置する小泉角田遺跡や山路下平Ⅲ遺跡、片山木谷遺跡等の弥生時代中期中葉以前に比定される諸遺跡との関連性を追及していく必要がある。

(池尻伸吾)



位置図



遺構配置図



SI01 完掘状況

やたながおいち

17. 矢田長尾I遺跡

- 1 所在地 今治市矢田
- 2 所属時期 弥生時代後期～古墳時代終末期
- 3 調査期間 平成15(2003)年11月4日
～平成16(2004)年3月5日
- 4 調査面積 3,000m²
- 5 調査原因 今治新都市開発
- 6 担当者 山内英樹 中島弘二 越智憲悟
木原貴子
- 7 調査概要

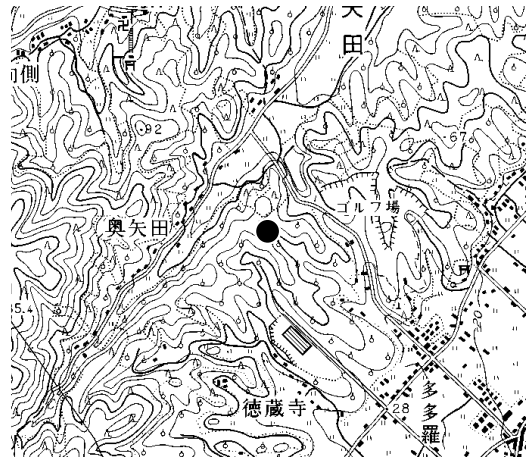
本遺跡は、今治平野西部の北東側へ大きく延びる丘陵の頂上部およびその斜面部に位置し、標高は67～77mである。また、この遺跡が立地する丘陵には、弥生時代から中世にかけての集落跡、墳墓が展開している。調査の結果、弥生時代中期～後期、古墳時代終末期(7世紀)の遺構・遺物が確認された。

弥生時代の遺構は、主に丘陵尾根筋および頂上部直下に展開し、段状遺構4基、竪穴住居跡1棟、土坑4基、溝状遺構9条、柱穴13基、性格不明遺構1を検出した。遺構の立地に関して注目される点として、段状遺構をはじめとする遺構の展開が主に丘陵西側斜面(「奥矢田」側)に集中し、見通し良好な南側斜面には極めて少ないことが挙げられる。また丘陵頂部にある竪穴住居跡SI01では、住居床面に壁溝を持ち、弥生土器(甕)の出土もみられる。また、明確な時期は判断しがたいが、SK04では鉄器の副葬がみられることから何らかの埋葬施設である可能性が高く、鉄器の詳細な分析を待つて再度検討を加えていきたい。

古墳時代の遺構としては、東側斜面部にて、長径約8mの楕円墳が確認された。盛土をおこなった後、墳丘背面に円弧状の周溝を巡らせており、前面は後世の削平を受けてはいるもの、比較的遺存は良好であった。

埋葬施設は横穴式石室を採用しており、石室最奥部の幅が約100cmと狭小で、立柱状の仕切石が無く、無袖の平面プランである。石室は奥部に一枚天井石が残っており、かなりの「持ち送り」が見られる。床面には、台石や枕石と思われる配列があり、須恵器などの出土遺物は左壁端に片付けられている点や焼土の範囲から判断して、最低1回の追葬が行われた可能性が極めて高い。出土遺物から、本古墳の所属時期は7世紀前半と考えたい。

(山内英樹)



位置図



遺構完掘状況



古墳全景(周溝含む)



石室内 遺物出土状況

やたながおいちごうふん
18. 矢田長尾1号墳

- 1 所在地 今治市矢田
- 2 所属時期 古墳時代後期
- 3 調査期間 平成16(2004)年2月2日
～平成16(2004)年5月19日
- 4 調査面積 900m²
- 5 調査原因 今治新都市開発
- 6 担当者 山内英樹 中島弘二 越智憲悟
和田正人
- 7 調査概要

本遺跡は、今治平野西部の南西より大きく延びる丘陵の尾根頂部に位置し、標高は75mである。調査の結果、古墳時代後期の古墳を1基確認した。

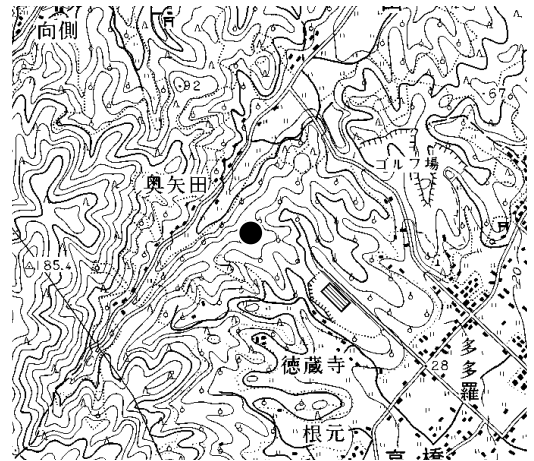
確認した古墳は、後世の攪乱や果樹畑の開墾により、現地形は改変されていたが、残存する墳丘盛土の様子や地山の加工による墳裾の確認作業により、直径約14mの円墳である可能性が極めて高い。また周溝は見られず、盛土はかなり下方へ流出している様子も確認されている。

埋葬施設は横穴式石室を採用している。天井石などの上部構造は消失しているが、側壁および羨道部の石積みは比較的良好に残っていた。玄室幅は最大で120cmと狭小で、かつ玄室長が推定約350cmと極めて細長いプランである点が特徴的である。立柱状の仕切石はなく、無袖で、床面には横長の石を2個縦に配置することで玄室との仕切としている。また、玄門部には人頭大の石を積み上げて石室を閉塞する様子が窺え、それに続く墓道も基底の掘り込みが一部残存している。閉塞石の積み直しは確認困難であるが、ある高さで石の平らな部分が上面に揃って検出されていることから、追葬に伴う行為(階段として使用か)である可能性も考えられる。

石室内からは須恵器や土師器片のほか、鉄製品(鉄鏃・鉄鎌・鉄刀?)、馬具片(轡)、玉製品(切子玉・小玉・管玉)、人歯など豊富な遺物が出土している。また床面には玉砂利が本来敷かれていたようであるが、その大半は先述の攪乱により消失している。

本古墳は、出土遺物の年代観より6世紀中葉から末葉にかけて機能していた古墳であると考えられ、その立地や豊富な副葬品から勘案して、当地域の盟主的役割を担っていた人物の墳墓である可能性が高い。

(山内英樹)



位置図



石室検出状況(墓道含む)



石室床面検出状況



完掘状況(墳丘含む)

さるかわ

19. 猿川遺跡(仮称)

- 1 所在地 北条市猿川字西ノ森
- 2 所属時期 縄文時代後期～中世
- 3 調査期間 平成15(2003)年6月2日
～平成16(2004)年3月25日
- 4 調査面積 5,500m²
- 5 調査原因 県道北条玉川線整備
- 6 担当者 児島祥之 平岡孝司
- 7 調査概要

本遺跡は、北条市内を流れる立岩川中流左岸の河岸段丘上(標高約106～110m)に位置する。

今回は1区・2区の調査を実施した。2区については、便宜上3つに細分し、東より2a・2b区、それらと北に接する部分を2c区とした。

基本層序は、1区については表土(耕作土・旧耕作土)直下に黒褐色土層(中世包含層)が存在し、下層は褐色土層(細礫混じり粘質土)、黄褐色土層(細砂混じり粗砂)になる。2区は表土(整地・耕作土・旧耕作土)直下に黒褐色土層(中世包含層)が存在し、その下層に褐色土層と暗褐色粘質土層の2層の縄文時代の包含層が認められ、巨礫を含む黄褐色土層になる。両調査区とも黒褐色土層の下面が中世の遺構検出面である。

今回の調査では、縄文時代後・晩期と中世の遺物・遺構が検出された。

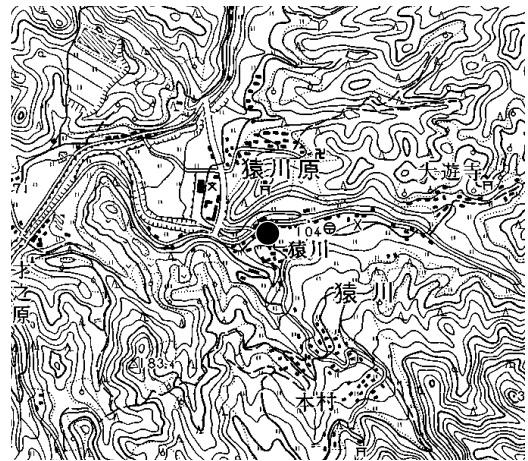
縄文時代後期は1・2c区から土器やサヌカイト・黒曜石などが出土した。遺構は1区では検出できなかったが、2c区からは少数ながら柱穴、土坑などを検出した。

縄文時代晩期については、遺構は未検出ながら、土器やサヌカイト・黒曜石の石核及び粗割素材・剥片類が出土した。

中世は1・2区ともに、土師質土器・瓦器などが出土した。遺構は柱穴、杭跡を多数検出したが、それらに規則的な配列は認められない。そのほかにも土坑、溝などを検出している。

今回の調査で最も注目されるのは縄文時代後・晩期と考えられる石材の出土である。近年、サヌカイトの流通形態については議論が盛んであるが、今回出土した石材は、瀬戸内海とその沿岸地域に構築されていたと考えられる黒曜石も含めた石材流通システムの実態を解明する良好な資料として重要である。今後は、石器素材の産地同定を行うとともに、本遺跡の性格を明らかにし、地域の中で本遺跡の位置づけをしていく必要がある。

(平岡孝司)



位置図



1区完掘状況



2区aサヌカイト出土状況(東から)



2区b遺物出土状況(南から)

20. 道後町遺跡

- 1 所在地 松山市道後町
- 2 所属時期 弥生時代～中世
- 3 調査期間 平成14年(2002)5月17日
～平成15年(2003)3月15日
- 4 調査面積 1,860m²(遺構面2面)
- 5 調査原因 県道東一万道後線拡張
- 6 担当者 寺嶋信三 松本圭太 菅野裕子
- 7 調査概要

本遺跡は平成11年から調査を行っており、今回の調査では、湯築城の西側を沿うように18・20～22・26～31区の調査を実施した。調査区からは弥生時代・中世の遺構・遺物を多数検出した。

弥生時代では、多数の土坑・柱穴を検出した。20・21区では弥生時代後期の自然流路を検出した。遺物については弥生時代前期末～中期初頭の壺・甕などが出土した。また、20区では弥生時代終末～古墳時代初頭の小形ぼう製鏡が出土した。

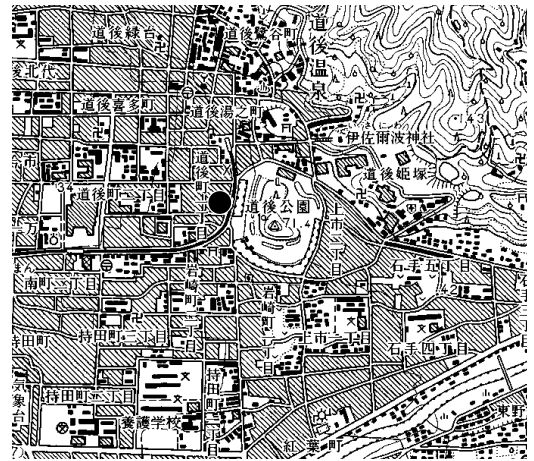
中世では、20区で道後地区の区画に当てはまる溝を検出した。また、石を使った遺構を多く検出し、21・22区では土坑に石を集めた遺構を検出した。22区では方形状に石を組んだ遺構を検出した。これは山口県の遺跡でも似た遺構が報告されている。29・30区では大きな石を「U字」状に配置した護岸のような遺構を検出した。遺物については20・21区で鉄製品の武器(刀子)・武具(小札・鞋)が出土した。また、29・30区で検出した護岸のような遺構からはベトナム産の白磁碗をはじめ、備前焼の甕・播鉢、中国製の青磁や青花(染付)などの陶磁器が出土した。

今回の調査で、弥生時代については遺跡北部に位置する30区まで遺構を検出することができ、遺跡の広がりを確認することができた。

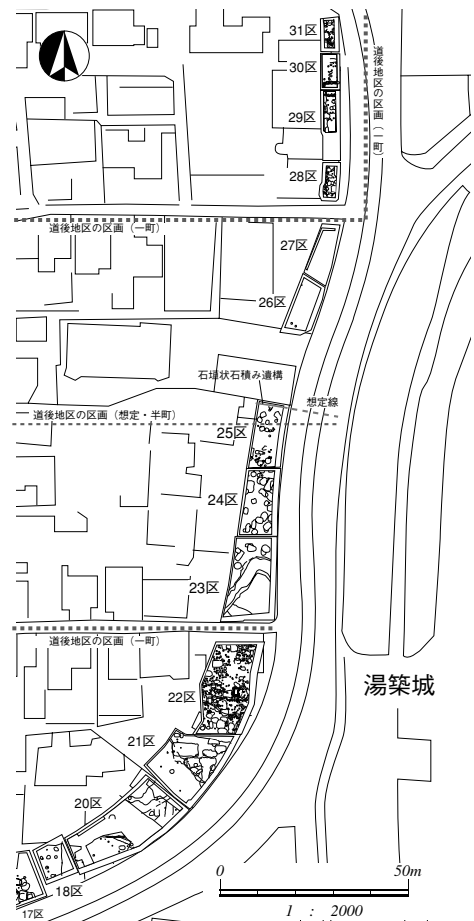
中世では湯築城内と共通する遺物も出土したが、城内では確認されていないベトナム産白磁碗が本遺跡の29・30区より出土しており、湯築城周辺の西側に一定以上の階層が存在したことが考えられる。

今後の調査・整理作業において湯築城の西側周辺にあたる道後町遺跡の区画・土地利用について明らかにしていきたい。

(寺嶋信三)



位置図



道後町遺跡調査区



23区完掘状況

あつたじょうあと
21.熱田城跡

- 1 所在地 北宇和郡津島町高田
- 2 所属時期 中世
- 3 調査期間 平成15(2003)年11月10日
～平成16(2004)年3月10日
- 4 調査面積 2,500m²
- 5 調査原因 一般国道56号宇和島道路建設
- 6 担当者 眞鍋昭文 高田明知
- 7 調査概要

本遺跡は津島町北部に位置し、岩松川支流の遠近川右岸丘陵上に築城されている。中世の津島町は土豪の越智氏が支配し、その居城である天ヶ森城をはじめとして15の城郭が分布調査で確認されている。

本城跡は単郭構造で、城の主体は主郭とその南北に設けられた堀切2条からなる。主郭中央に見張台と考えられる基壇状のマウンドを削り出し、主郭南西部には主郭から一段低くテラス状の平坦面を設けて、掘立柱建物跡1棟が配される。さらに、南堀切城内側から列石1列と不明瞭ながら土塁状の高まりを検出した。遺物は極めて少量で、掘立柱建物跡周辺から土師器の皿杯類4点・鉄釘1点、主郭中央部付近から土師器皿2点、見張台から石錘1点、東西斜面の崩落土中から土師器皿それぞれ1点ずつが出土したに過ぎない。

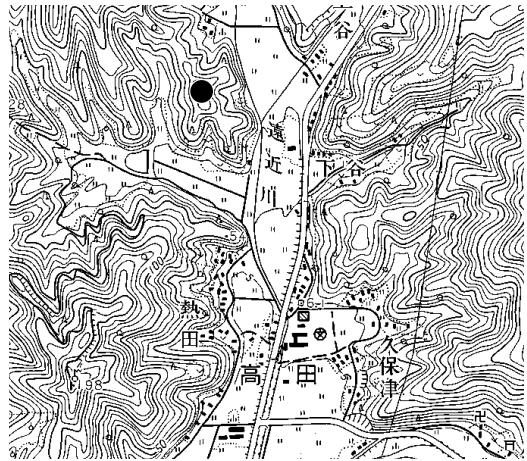
本城跡は尾根の鞍部に築城され、周囲の丘陵よりも低く、眺望に乏しい。また小規模な単郭構造で堅堀を持たないなど軍事的機能は不十分で、かつ、居住施設や遺物も少なく、生活痕跡に乏しい。

時期は遺物が少なく明確ではないが、土師器皿の特徴や堀切が箱掘りであることなどから、14世紀後半～15世紀前半頃と推定される。

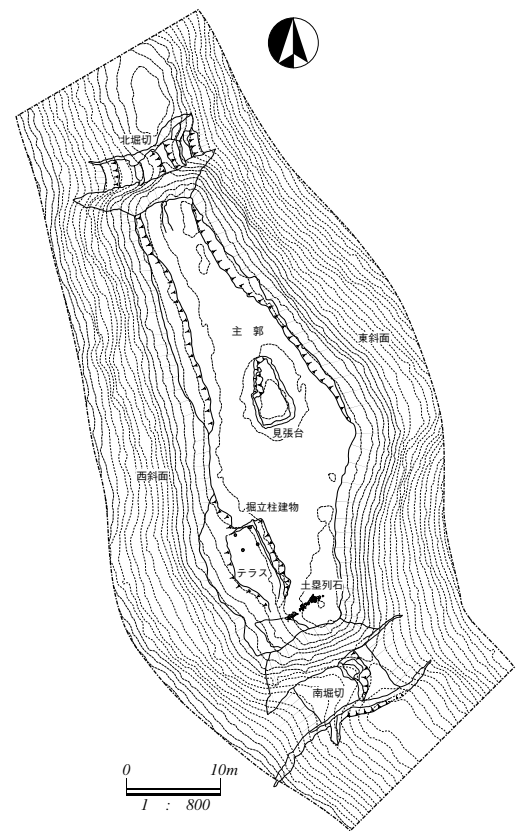
本城跡はその立地・規模・構造から、領主層の拠点的城郭とは考えられない。このような小規模城は郷村内の土豪や豪農を中心とする小村落を単位とした臨時的な避難施設と考えられ、「村の城」と呼ばれている。こうした施設は軍事施設と言うよりも、村落民相互の結束を高めるための象徴的な施設としての役割を担っていたものと考えられる。

時期的なものを考慮しないとすれば、熱田城跡もこうした「村の城」に類する山城である可能性が高い。とすれば、見張台の存在は戦略的機能を主眼とする施設、と言うよりもむしろ、村落共同体の結束を高めるためのシンボリックなランドマークとしての機能を持つ施設と解釈するのが妥当であろう。

今後は、周辺山城との構造比較や空間分析を行い、同時に、周辺の「村」の変遷とその社会政治情勢の変化を検証する作業を通して、本城の存在意義を明らかにする必要がある。
(眞鍋昭文)



位置図



遺構配置図



上空から見た熱田城跡

3 刊行した報告書の概要

本年度は別表にまとめたように第109集から第114集までの計6冊を刊行した。刊行した報告書の概要は以下のとおりである。

「星原市遺跡・星原市東遺跡」

新居浜市外山町および星原町に所在する星原市東遺跡・星原市遺跡の報告書である。星原市東遺跡では弥生時代前期末～中期初頭・中世・近世の遺構・遺物を検出しており、星原市遺跡では中世の遺構・遺物を検出している。本書では星原市東遺跡で検出した各時期の遺構・遺物を整理すると共に、同地域における弥生時代の集落の様相や、中世の廃滓遺構について分析を加えている。また、星原市遺跡は土師器が大量に出土しており、これらの土師器の分類を行い、一括大量廃棄について考察している。
(若杉美香)

「伊予神社II遺跡」

伊予郡松前町に所在する伊予神社II遺跡の報告書である。古代から中世の遺構・遺物を検出している。本書では、各時期の遺構・遺物の概要を整理し、景観復元を行うと共に、重信川の流路変遷について、過去の研究成果を整理し、遺跡の分布と本遺跡の調査結果を踏まえ、流路の検証を行っている。
(稲葉靖司)

「道後鷺谷遺跡2次」

松山市道後鷺谷町に所在する道後鷺谷遺跡の報告書である。弥生時代から中世にかけての遺構・遺物を検出している。本書では弥生時代中期の溝状遺構をはじめ、各時期の主要遺構について整理し、遺跡周辺の景観復元を行っている。
(三好一史)

「矢田八反坪遺跡3次」

今治市山路・矢田に所在する矢田八反坪遺跡の報告書である。弥生時代から中世にかけての自然流路を検出している。本書では各時期の遺構・遺物の概要を整理し、同遺跡の時間的・空間的な位置付けを行っている。また、植物珪酸体分析や花粉分析などの自然科学分析もおこなっている。
(西川真美)

「南斎院土居北遺跡 南江戸鬮目遺跡(2次調査)」

松山市南斎院及び南江戸に所在する南斎院土居北遺跡・南江戸鬮目遺跡の報告書である。どちらも中世の集落遺跡であり、南斎院土居北遺跡では中世の方形区画溝を巡らせた居館跡を検出し、南江戸鬮目遺跡では土師器の杯・皿が一括大量出土しており、特に土師器を意図的に遺棄したと考えられる遺構が検出されている。本書では、両遺跡の掘立柱建物の推定復元を行い、周辺遺跡における対比を試み、出土土器の製作痕跡を検討することにより、同時期の土器生産及び流通について考察を行っている。
(中野良一)

「善応寺畦地遺跡・大相院遺跡・別府遺跡」

北条市善応寺及び常保免に所在する善応寺畦地遺跡・大相院遺跡・別府遺跡の報告書である。善応寺畦地遺跡は弥生時代及び中世、大相院遺跡は弥生時代～中世、別府遺跡は縄文時代後期・古代・中世の遺構・遺物を検出した。大相院遺跡の周辺は、河野氏発祥の地であり、河野氏の拠点が松山市道後にある湯築城に移った後も善応寺の再開発を行ったといわれており、河野氏に関連する

調査成果が期待されたが、調査の結果、直接河野氏と結びつける遺構・遺物の検出には至らなかった。同遺跡では、弥生時代後期後半～古墳時代初頭にかけての遺構・遺物が数多く検出された。特に斜縁鏡及び重圈文系小形前漢境の破鏡の出土は北条平野における大相院遺跡の意味を考える上で重要な資料と言える。 (三好裕之)

平成15(2003)年度 報告書刊行一覧

シリーズ 番号	刊 行 年 月	報告書名 掲載遺跡名	面積 (m ²)
第109集	平成16(2004)年3月	星原市遺跡・星原市東遺跡-一般国道11号新居浜バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第1集-	5,660
第110集	平成16(2004)年3月	伊予神社II遺跡-一般県道八倉松前線道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-	1,594
第111集	平成16(2004)年3月	道後鷺谷遺跡2次-一般県道六軒家石手線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-	100
第112集	平成16(2004)年3月	矢田八反坪遺跡3次-浅川中小河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-	3,200
第113集	平成16(2004)年5月	南斎院土居北遺跡 南江戸鬮目遺跡(2次調査)-宮前川広域基幹河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-	3,200
第114集	平成16(2004)年3月	善応寺畦地遺跡・大相院遺跡・別府遺跡-一般県道湯山高縄北条線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-	9,135

4 道後公園（湯築城資料館）

1.事業の概要報告

文化財を活かした県有施設として、平成14年4月に道後公園(湯築城跡)内に、湯築城資料館と復元区域がオープンし、財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センターが道後公園全体の管理運営・普及啓発事業を県から委託を受け、国史跡湯築城跡(平成14年9月指定)の活用および県内外への情報発信を行っている。

平成15年度は、道後公園来園者に湯築城資料館や復元武家屋敷等の解説・案内を行うボランティアの活用事業と、一般県民や児童生徒を対象とした普及啓発事業を行った。

第2回「湯築城跡シンポジウム」では、西瀬戸内の戦国大名の遺跡の特徴などが議論され、多数の参加者を得た。「親子で学べる湯築城講座」では、湯築城の模型を作り、城のつくりについて学ぶ講座を開催した。また、今年度からリピーターの増加を図るため「湯築城資料館企画展」を開催し、近年湯築城下町の可能性が高まってきた道後町遺跡の発掘調査成果等を展示した。

一方、広報誌「湯築城だより」を年2回発行し、広く情報発信を行っている。

(企画普及係長 中圓尾正)

2.湯築城資料館利用状況

年 月	開館日数	入館者数	備 考
14年度	297	76,473	
15年			
4月	26	6,105	
5月	27	4,969	
6月	25	3,965	
7月	27	3,989	
8月	28	4,635	
9月	25	3,251	
10月	27	4,476	
11月	26	4,327	
12月	24	2,449	
16年			
1月	24	2,683	
2月	25	3,050	
3月	26	5,049	
15年度計	310	48,948	
累 計	607	125,421	

3.国史跡湯築城跡普及啓発事業の概要

(1)第2回湯築城跡シンポジウム

「湯築城をとりまく西瀬戸内の戦国群像～河野氏・大内氏・大友氏の活躍とその遺跡～」

開催日時 平成15年11月16日(日)13:00～16:30

会場 松山市立子規記念博物館

参加者 約220人

主催 愛媛県教育委員会・財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

後援 愛媛県、松山市教育委員会
 協賛 平成15年度県民総合文化祭協賛事業
 内容 西瀬戸の戦国大名である当地の河野氏をはじめ、日明貿易で力をつけ独自の文化を築いた大内氏、南蛮貿易で栄えキリシタン大名としても知られる大友氏の歴史や、近年の発掘調査によって解明されつつある各氏ゆかりの城館跡の特徴について議論された。
 事例発表
 「大友氏と大内氏関連遺跡」古賀信幸(山口市市史編さん室室長)
 「大友氏と中世府内城下町跡」坂本嘉弘(大分県教育委員会文化課主幹)
 「河野氏と湯築城跡」松村さを里(湯築城資料館学芸員)
 討論

(2) 平成15年度親子で学べる湯築城講座

「つくってみよう！！湯築城」

開催日 平成15年7月19日(土)・20日(日)・26日(土)・27日(日)
 参加者 小学5・6年生親子44組
 主催 愛媛県教育委員会・財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
 内容 全2日の日程で、湯築城を見学し、中世の城のつくりについて解説を交えながら、1/800の湯築城の立体模型づくりを行った。

(3) 平成15年度湯築城資料館企画展

「湯築城周辺の遺跡展～みえはじめた城下のすがた～」

期間 平成15年7月15日(火)～11月9日(日)
 会場 湯築城跡復元区域 武家屋敷2
 展示遺跡 道後町遺跡・道後今市遺跡・岩崎遺跡
 主催 愛媛県教育委員会・財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
 内容 近年調査が行われた湯築城西側に広がる中世遺跡(道後町遺跡、岩崎遺跡、道後町遺跡)の発掘調査成果を、写真や解説パネル、出土遺物によって紹介し、道後町遺跡が湯築城の城下町である可能性を探った。

(4) 広報誌「湯築城だより」

号数	刊行	記事
第3号	15年8月	特集記事：「特集！みえはじめた城下のすがた」 イベント紹介：「親子で学べる湯築城講座『つくってみよう！！湯築城』」 ミニギャラリー：「銭貨」 中世を知ろう：「中世の物価」 ほか
第4号	16年1月	特集記事：「特集！湯築城の構造1」 イベント紹介：「第2回湯築城跡シンポジウム」「平成15年度湯築城資料館企画展」「松山ライトアップ2003」 ミニギャラリー：「土師質土器皿1」 中世を知ろう：「かわらけと武家儀礼」 ほか

え ひ め
愛比売

—平成15(2003)年度年報—

平成16(2004)年11月30日

編集・発行 財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター
〒790-0003 愛媛県松山市三番町4丁目10番地1
TEL (089) 941-5645 FAX (089) 931-8302
印 刷 アマノ印刷有限公司
